



SOTO禅インターナショナル 2019 REUNION (美ヶ原 旅館「すきもと」にて)



REUNION in 廣澤寺 お茶会



美ヶ原温泉での二次会。賑やかでした



すっかり打ち解け合った海外子弟研修会の4人



ハワイ島でのランチタイム。デザートはココナッツアイス

料金別納郵便
S Z I

SOTO
Vol.60
2019年



インター ナショナル

発行日／2019年12月10日

発行人／田宮隆児 編集担当／佐藤慧真
発行所／SOTO 禪インターナショナル事務局
〒474-0052 愛知県大府市長草町本郷40 地蔵寺内
TEL/FAX: 0562-44-4936 地蔵寺 TEL: 0562-46-1963
URL: <http://www.soto-zen.net/>

SOTO禪インターナショナル会報60号記念号



SOTO禅インターナショナル REUNION in 廣澤寺 (松本 廣澤寺本堂にて)



8月 海外子弟研修に出発前の参加者と保護者の皆さん



南米国際布教60周年行事より、モニュメントの除幕式

卷頭

多様性にあふれる現代で宗門はどうあるべきか

曹洞宗教化部長 喜美候部 謙史 (群馬県長年寺住職)



SOTO禅インターナショナル会員の皆様におかれましては、平素より宗門の国際布教活動にご協力を賜りまして感謝申し上げます。現在、各国政府機関や、企業、民間団体ではエス・ディー・ジーズ(SDGs)正式名称、サステナブル・デベロップメント・ゴルズ、「持続可能な開発目標」の達成に向けての動きが活発になってきております。現代においても未来においても「誰一人取り残さない社会の実現」を目指し、国連加盟193ヶ国が「貧困や飢餓」「不平等の是正」「環境の保全」「平和的・社会の実現」などに關連する17の課題を、統合的・包括的に解決していくこうとするものです。

我々曹洞宗も、2018年11月に大本山總持寺を会場に開催された第29回世界仏教徒会議の際の「東京宣言」をもって、SDGsの実現を支援していくというのが、全日本佛教会・釜田謙文理事長の表明により決定されました。

宗門においても1992年より、「人権・平和・環境」のスローガンを定めて以来、種々な活動を取り組んできました。このスローガンそのものが、世界規模の活動であり、貧困や差別、環境問題を包括的に理解し、連携して目標を達成する、世界共通の理念(SDGs)と同じ理念であります。

現在、日本のSDGsの達成度の順位は世界15位と、依然としてジェンダー平等や責任ある消費・生産、気候変動対策、パートナーシップに大きな課題があると指摘され、未だ完全に「誰一人取り残さない社会」の実現には至っていないのが現状でございます。

海外の宗門の寺院からも学ぶことが多い現代で、そういう理念なども海外から輸入していくたく考えており、世界平和の実現に向け、我々の掲げたスローガン、そしてSDGsの達成の為に会員の皆様と共に歩んでいきたい所存でございます。

Preface (巻頭英訳)

Where should Soto Zen Buddhism stand in today's diverse world?

The Reverend Kenshi Kimikōbe

Director of Education and Dissemination Division
Soto Zen Buddhism Administrative Headquarters

I extend my heartfelt appreciation to the members of Soto Zen International (SZI) for your cooperation in the international dissemination of Soto Zen Buddhism.

In recent years, many countries, businesses, and private organizations have been actively working toward achieving the "Sustainable Development Goals" (SDGs) which are 17 global goals set up by the United Nations. Setting their ultimate goal as "the realization of a society that leaves no one behind today and in the future", the 193 countries comprising the United Nations together strive to comprehensively resolve the 17 major issues in the world such as poverty and starvation, rectifying inequality in society, protecting and preserving our environment, and making a peaceful society a reality.

In accordance with the declaration made by the Reverend Ryubun Kamata, president of the Japan Buddhist Federation, during the 29th World Fellowship of Buddhists General Meeting held at Daihonzan Sojiji in November 2018, we, of Soto Shu, will also join in support of making SDGs a reality.

Soto Shu has actively done many different things since the slogan "Human Rights, Peace, Environment" was laid down in 1992. This slogan itself is one that is shared world-wide with the same principles, and we work together with everyone in achieving our goals of trying to deeply understand poverty, discrimination, and environmental problems.

Currently, Japan is ranked 15th in the world in the rate in which they have achieved their Sustainable Development Goals (SDGs). It was pointed out that Japan is yet to clear major issues such as gender equality, responsible consumption and production, climate change countermeasures, and partnership for the goals. The present reality is that we are still far from reaching our goal of "leaving no one behind."

Today, where there is a lot to learn from temples and centers in foreign countries, I am also thinking about reporting those principles from outside of Japan, and together with the SJI members, I would like to work toward world peace, the realization of the slogan that we laid down, and the achievement of the Sustainable Development Goals.



▶ 傳 領	多様性にあふれる現代で宗門はどうあるべきか	菅原宗教化部長 菅美英郎 緯史	2
▶ SOTO禅インターナショナル総会のお知らせ			3
▶ 特 集	両大本山ワークショップ抄録		
	世界中の私たち「日本の懇親」	世界仏教徒青年連盟会長・大阪府洞雲寺住職 村山 博雅	4
	修行僧の懇親(筑摩)		7
▶ SJI主催 第5回 海外子弟研修会 in ハワイ 報告		SJI事務局・新潟県興福寺住職 佐藤 慧真	9
▶ 特 集	SOTO禅インターナショナル REUNION in 廣澤寺 報告		13
▶ 海外報告			16
▶ 海外レポート	①両大本山南系別院佛心寺 南アメリカ国際布道説教部 60周年記念座談会	富山県高明寺住職 佐藤 浩身	17
	②三心寺近況	栄國三心寺住職 岩村 正博	18
	③純化させてはならない記憶	ハワイ・コナ大福寺 中出 慶光	19
	④海を越えて学ぶ「梅花のこころ」	千葉県新井寺住職 松井 星孝	22
	⑤南北アメリカ国際布道説教部の祝賀研修会に出席して	愛知学院大学准教授・宮城県城南寺住職 菅原 研州	23
	⑥海外特別寺院開創60周年記念行事について	SJI事務局・山形県清龍寺住職 大山 健治	24
	⑦タイ上座部 スカトー寺僧在レポート	SJI事務局・新潟県興福寺住職 佐藤 慧真	25
▶ SJI express	会費納入者・賛助金納入者名簿		27

特集 両大本山ワークショップ抄録

[令和元年9月3日(火)於 大本山總持寺／9月5日(木)於 大本山永平寺 開催]

世界の中の私たち「日本の僧侶」

講師 村山博雅（世界仏教徒青年連盟会長・大阪府洞雲寺住職）



講師の村山博雅老師

世界仏教徒青年連盟

(the World Fellowship of Buddhist Youth)とは

世界の仏教徒の友好親善、仏教教義の普及、世界平和への貢献を目的とする国際組織である。世界仏教徒連盟 (the World Fellowship of Buddhist/WFB・本部センターはパリコク41カ国189センター) を親会として、1972年に設立された。現在165国42地域センターに発展。主な事業として国際仏教徒青年交換プログラム、国際仏教徒青年フォーラム、仏教徒青年指導者研修、仏教徒青年指導者セミナーなどがある。基本2年ごとにWFBと共に世界大会が開催される。全日本仏教青年会 (JYBA) が、1978年開催の日本大会への参画を契機に設立され、また昨年日本で開催された大会において村山師が日本初の世界仏教徒青年連盟の会長に選出されている。

してこの度の話の中心となる「国際交流」です。アジアの仏教圏の僧侶や一般在家信者の方々と、日本の仏教を胸に、しっかりと自分のアイデンティティを作った上で交流していくというものです。2歳ぐらいの時から仏・法・僧という言葉を聞いて、人へのいたわり思いやり、慈悲と智慧を以て幸せを作っていくなければならないんだよと教えられて育った方々との国際交流です。ですから私たちがぶれていると国際交流は成り立ちません。

(ここで世界仏教徒青年連盟を紹介するVTRが紹介される。)

世界仏教徒青年連盟には沢山目的があるのですが、の中でも大きな目的は、世界に於いて、仏教を媒介にしてみんなが手を携える大きなコミュニティを作って行くということです。それによりおそらくキリスト教やイスラム教の国々と共に世界の平和について考えていく一つの大いな力が生まれるのではないかと、そういうコンセプトが連盟にあると覚えておいていただければと思います。

◆これまで行った様々なボランティア活動について

私は国際交流がしたいから僧侶になったわけではありません。お寺で生まれ、長男で生まれたことをご縁に出来度したわけです。そう簡単に修行まで真っ直ぐに歩いて来たわけではありません。子どもの頃は復興のために師匠が入った荒れたお寺で、豊は腐っていましたし、雨が降った時は、たらいや洗面器を持って雨漏りを探し、見つけて褒められるというような、そんな思い出が多くあります。師匠はお寺のことに専心し、がんばって復興を成し遂げていきました。その姿を見てお寺って本当に大変

だなと思いながら育ちました。なので私は、東京の大学に進み、仏教学ではなく他の学問を専攻しました。その頃、阪神淡路大震災が起こりました。復興を成し遂げた実家のお寺が一瞬で全壊してしまいました。檀家さん、友人も亡くしました。このことをきっかけに、私は、僧侶という生き方に今一度向き合ってがんばらなければいけないという覚悟を持つようになりました。そして改めて大学院で仏教の勉強をいたし、永平寺に安居させていただきました。送行し、地元に帰ってからは、社会において様々な貢献や支援をしていきたいという思いから、大阪曹洞宗青年会と農中市仏教青年会、大阪府仏教青年会の三つの仏教青年会に所属するようになりました。

(さまざまなボランティア活動の写真が紹介される。)

子どもたちを預かる禅の集いです。私が事務局をやつた時には160名もの参加者をいただきました。

阪神淡路大震災慰靈法要です。今まで毎年、たかとり教会というカトリック教会で行っています。宗教を超えてお勤めいたします。

今の時代様々な災害がありますが、その時ごとに大阪府や市の青年会では難波などで托鉢をしています。

奈良の東大寺の千僧法要です。毎年4月26日に法要を行っています。

こんな活動をしながら、私はこの三つの青年会の会長を務めさせていただくことになりました、その団体が加盟する、全国曹洞宗青年会や全日本仏教青年会などの団体に出向するようになっていきました。そして全日本仏教青年会におきまして理事長の役をお引き受けすることになったのです。その就任直前に、東日本大震災が発災いたしまして、理事長として一生懸命活動させていただきました。

写真は、福島市音楽堂です。この頃はちょうどホールの除染作業が終った後で、三回忌の慰靈法要と復興祈願のコンサートを勧めさせていただきました。全国から各宗派の皆様に集まっていたとき、現地の千人以上の方と共にお祈りさせていただきました。

こちらの写真は、子どもたちの通学路の除染活動です。継続的にさせてもらっていました。

福島の子どもたちが放射能のため外で遊べないという状況が大変く続いている。保養プログラムとして子どもたちを預かりました。

(復興地の写真説明が続く。)

理事長の2年間は、檀務のある土日以外はだいたい、東北の支援活動か、全国や海外の会議に出向いていたと思います。

◆世界仏教徒青年連盟での活動

私は最初、世界仏教徒青年連盟の副会長への立候補

を奨められた時、恐れ多いことですし、英語も得意ではありませんので、断っておりました。しかし福島県と、そして日本全体に対する風評被害を何とかしなければならないと思い、日本の正確な事象を理解していただく手助けがしたいという思いから連盟の選舉に立候補させていただきました。連盟での活動目的は決まっていました。もともと理系ですので物理や数学は得意です。いろいろなところで拙い英語ですが、日本の放射能の状況というものを出来得る限り正確に発信させていただきました。写真は福島で海外の学生と日本の学生が集まり、復興支援として被災地で様々な活動をした、国際仏教徒青年交換プログラムです。100名以上の参加者が集まり、成功させることができました。

(さらに写真の説明が続く。)

これは世界大会の集合写真です。2年ごとに集まり、会議を行っていますが、実は僧侶より一般の方のほうが多いです。これがいわゆる世界における仏教、アジアにおける仏教徒のネットワークの姿になります。

以前は平均で2ヶ月に1回くらいの頻度で海外へ行っていましたが、今は月に1~2回行くこともあります。そんなアジア現地での交流を7年間続けています。そして迎えたのが昨年11月の日本での仏教徒世界大会です。主催団体の全日本仏教会は、曹洞宗も加盟する日本で一番大きい仏教団体です。この全日本仏教会の会長に曹洞宗管長江川辰三紫雲臺猊下が、理事長に釜田隆文前宗務総長老師が就任されていらっしゃいました。そのこともあり、大本山總持寺が世界大会の中心となりました。

これは、日本の仏教会と世界の仏教会の加盟組織団です。実は縁遠い団ではありません。皆様方もこの組織団の中に必ずあります。日本仏教は、有名なところだけでも約50宗派以上あります。世界で一番宗派の多い国です。この曹洞宗は、他の56宗派とともに、都道府県の地域仏教会と、全日本仏教青年会などの宗派、地域を超えた仏教団体と一緒に、全日本仏教会というところに加盟しているのです。そしてこの全日本仏教会と同じような団体が、41カ国に189あり、合わせて190の仏教会によって作られているのが世界仏教徒連盟となります。

青年会についても同じように、全国曹洞宗青年会の他、公式の宗派仏教青年会8団体と、それに都道府県レベル地域仏教青年会4団体を合わせて、12の青年会が加盟して日本で一番大きな仏教青年会、全日本仏教青年会を構成しています。この全日本仏教青年会と同じような仏教青年会がそれぞれ15カ国にあり、世界仏教徒青年連盟に加盟しているというわけです。ですから私たちは、全国曹洞宗青年会の加盟団体の会員であるならば、全国曹洞宗青年会を通じて全日本仏教青年会に出向が出来て、世界仏教徒青年連盟の活動に参加出来るということに

なるのです。私もそんなことは考えていなかったのですが、出向により徐々に世界の活動に関わるようになっていったということです。

世界仏教徒連盟が何かというと、分かりやすくいうと、仏教の国連のようなものです。日本の私たちもアジアに目を向ける時代になって久しいですが、その上で世界連盟という存在を度外視するのではありません。この連盟での活動によって直接的に、日本の僧侶、佛教者に対する信頼と理解を、アジア社会に構築していくことが出来るのです。だからこそ私も一所懸命に参画させていただいている次第です。

◆上座部仏教団と大乗佛教団

私たち世界仏教徒青年連盟は、特に青少年に対する育成プログラムを大切に行ってています。今、駒澤大学や大正大学、慶應義塾大学などの佛教青年会の学生たちが参画してくれています。ご覧のように集合写真のメンバーを見てみると、在家の方がバーッと並んでいて一番前の真ん中の方にだけお坊さんが並んでいます。千人ぐらいが集まる世界大会などになるとそういう構図になるのです。なぜかというと、佛教の世界というのは大きく分けて上座部仏教と大乗佛教で成り立っていますが、この上座部仏教においては、僧侶の皆様は私たちのように飛び回っていろいろな所でボランティアをやったりすることが禁じられています。サンガの中にしっかりと留まり、自身の研鑽を積んでいくということ、それを何よりも大事にするのが上座部のお坊さんです。それに対し、大乗佛教の僧侶というのは、もちろん自身の研鑽は当たり前のことでして、衆生を救済することを菩薩道として行い努めねばならないとされますので、いろいろな所に出て社会活動やボランティアをすることが僧侶としての務めとなるわけです。

実は日本の佛教会というのはほとんどがお坊さんだけで出来上がっています。しかし大乗佛教団でも他の国を見ると、佛教会ではお坊さんは大変稀有な存在です。台湾や韓国の方々とも交流してきましたが、何かやっぱり日本とは雰囲気が違うんですね。なぜかというと、僧侶には戒律を守っているということによって良い意味でも悪い意味でも在の方より上であるという序列があります。その意味では、私は日本の佛教というのは、他の国の伝統佛教宗派と相容れないところがあると感じています。

それから、海外で佛教系新宗教の皆様方が活動されていると、その国ではそれが「日本の佛教のすべて」だと思われてしまうことがあります。なぜかというと、特に上座部団では宗派がないからです。大乗になりますと人を救うためには様々な方法が必要となり、そこから宗派が生まれますが、上座部佛教には基本的にその必要が

ありません。日本佛教についての知識と理解がない今の状況では、戒律のこともそうですが、アジアにおいて日本は常に誤解を受けていく可能性があります。そんな意味合いからも、国際交流活動には大きな意義があると言えます。

◆戒律と日本の僧侶

私が海外で交流を始めて、一番最初に大体聞かれることは、「村山さんは奥さんいますか? 家族はいますか?」という事です。実は国境を超えた後、伝統的な宗派のお坊さんが結婚するという事は絶対ありません。それが僧侶の基本となります。その次に聞かれるのはお酒と肉食のことですが、お酒は別として肉食が問題視されるることはさほどありません。なぜかというと、砂漠地帯のように肉を食べないと暮らせないような地域もあるからです。一番問題なのは、妻帯なのです。日本であらゆる宗派の僧侶が妻帯するようになったきっかけは、明治期の国からの布告によるものでした。肉食妻帯と蓄髪は勝手にして良いし、法要以外では一般の服を着るのも良いという内容でした。それに反発し、がんばったお坊さんたちもいましたし、曹洞宗宗務庁では40年間に渡り、これに流されると発信し続けたと聞いております。しかし今現在の日本の佛教は決して戒律主義ではありません。

だからといって私は戒律主義に戻らなくてはならないと言っているわけではありません。妻帯肉食し一般の服を着ることが出来る日本だからこそ、日本佛教の良いところが生まれている、と皆さん方に確固たる自信を持っていただきたいと思うのでこの話をしています。私はそういう意味で日本佛教は世界の最先端を行っていると思っています。妻帯し家族を持って、子どもを持って分かることも沢山ある。それがないからこそ実は幸せを実現するところも分かれます。この二つの方向性が両方とも認められる日本の佛教者は、だからこそ一般の方々と同じ悩みを実地の経験として身体で肌で心でしっかり感じて、その悩みからブッダの教え、道元禪師様の教えによって救われた経験を語って行くことが出来る唯一の僧侶なのです。それが私が思う理想的な佛教なのであります。皆様の将来における布教師としての最高の武器になっていくのだということを是非とも知りていただきたいと思うのです。

これからも佛教青年会、曹洞宗青年会、そして沢山の尊敬する諸先輩、皆様方と共にアジアの国際交流の舞台を切り開いていきたいと思っております。そこに参画された皆様方には僧侶として佛教徒としてどうあるべきか、肌で感じられる交流が待っています。しっかりと作り上げて皆様方をお待ちしていますので、何卒よろしくお願ひいたします。ご清聴ありがとうございました。

修行僧の感想（抜粋）

大本山總持寺

●世界仏教徒青年連盟の活動の中で、青年交換プログラムというのがあり、各国の青少年の「共通認識」を高めるという言葉に興味を持ち特に話を集中して聞かせていただいた中で、日本の佛教僧の特殊さを改めて実感しました。現在我々の中で妻帯は当たり前のようにになっていますが、他国の熱心な佛教徒にとってはあり得ない事なのだという事を眼前にして、これまでいいのだろうかと感じ、考えてみたいと思いました。（茨木県・30年）

●海外と日本では佛教のとらえ方が違い、肉食妻帯一つでも海外としたらあり得ないと思われるがあることを知りました。しかし、それらの違いで日本の僧侶はお坊さんではないと考えるよりも、私達だからこそ分かる、出来る事を共有していくことが出来たらなと考えました。（静岡県・31年）

●世界仏教徒青年連盟の全貌を紹介していただきまして、その国際活動の広さが分かりましたが、もう少し具体的な活動を説明するももっと良いと思います。（ブラジル・28年）

●お話を聞いて思い出したのは、昨年の全日本佛教徒会議でした。世界の佛教徒の集まりに自分の中ですごい事が起きているのだなとただただ思っていました。この集まりがいろんな国で行われていて、日本から多くの学生さんが楽しそうに参加している姿を見ると、自分も参加してみたいなと思いました。（新潟県・29年）

●外国の方とのふれあいがこの後より重要になっていくと思うが、もっと外人とふれ合える寺でありたいと思います。（神奈川県・30年）

●海外ではお坊さんよりも一般の佛教徒の方が佛教を布教することに尽力しているということが意外でした。講師の先生が言っていた出家することに周りの方がすごいというような日本になれば良いなど

自分も思いました。自分も送行した後、青年会に入り、ボランティアなど様々な経験を積みたいです。（福岡県・30年）

●日本の僧侶と海外の僧侶には妻帯するしないへの意識の違い、他にも日本の僧侶と違った部分が見られ、資料や今回の講義で世界の佛教会、佛教青年会について知ることが出来ました。日本のみならず、海外の方々にも禅の教えが少しづつ広まっていることが出来ているのも、佛教会の人々が布教を続けて下さっているおかげなのだと思います。佛教の知識はもちろんの事、自分の幅を広げるためにも、少しづつ英語にも取り組めたらと思います。（福島県・29年）

●今回の講演は私の知らない日本と世界との僧侶の考え方の違いや在り方の違いなどをお聞きすることが出来、大変勉強になりました。日本と世界には差があるのだなと思った時、私はハッと思いました。差と考えた自分がいる事です。本当は何も差なんていません。地球の中の世界の中の日本で生きてきた中で、自分に後から入って来た話で、何も差なんてないことを改めて考えさせられました。今は人と人だけではなく、この世にあるもの全て、いやもっと大きな世界に私は生きて、生かされていることを実感しています。（山形県・31年）

●海外と日本の僧侶、佛教のあり方にこれほど違いがあるのかと少し驚きました。戒律の違いがあるわけではありませんが、守っているかどうかという点が大きいと思います。日本で認められていても、海外では認められない事もあるというのは初めて知りました。その他多くの事を知り、とても勉強になりました。送行した後にでも行ってみて、体験してみたいと思いました。（兵庫県・31年）

大本山永平寺

○村山老師が使命感から世界仏教徒青年連盟の会長のお仕事をされていることに尊敬の念を抱きました。日本の佛教が世界から尊敬されているというお話をありました。その理由をもう少しお聞き出来たら良かったと思いました。日本では佛教離れ、宗教離れが進んでいるという話も言われますが、世界的な佛教国ではどうかという事、そして日本の状況についてなにかアドバイスのようなものがあるのかどうか知りたいなと思いました。（広島県・30年）

○菩薩戒の日本の僧侶は上座部の僧侶に対して少し引け目を感じるのではないかと私個人は思っていますが、特に道元禪師に関しては世界が注目しており、海外の方の関心の高さは誇るべきところかと思います。マインドフルネスへの関心と注目も高い点

を見ても、今日日本の曹洞宗が海外に向けて交流を囲り、他宗教からの注目を維持していくためには海外交流活動は善根の種子を蒔く大切な事業であると感じました。お檀家さんに曹洞宗の教えが世界に注目されているという事を自信を持って伝える事が出来るという事は、三宝帰依の安心につながっていかかと思います。

(長崎県・31年)

○自分の中でもうまく整理できず、モヤモヤしていることがあります。日本の大乗仏教の方々は非僧非俗の状態で人々を救う道を歩んでいるのだけれども、仏教離れともいわれている今、僧侶が人々にとってそれほど尊敬の対象ではなくなったということもあるように思います。あるいは、何か世の中に貢献できる、心の救済につながる何かを推し進めていけば、僧侶に対する見方も違ってくるようにも思います。

(岐阜県・30年)

○私は将来国際布教師になることを夢見ておりましたが、漠然とした夢を持っている私に新しいアプローチの仕方を教えていただきました。上座部仏教圈の方々からも注目される禅ZENがそれだけ魅力的で、とてもない潜在能力を持っているという事を実感いたしました。私自身更なる理解と精進に励みたいと感じました。

(長野県・31年)

○自分のお寺を持ち、お寺の仕事をしながらでも世界を周り、他の国仏教との交流をしていると聞き、とても大変だと感じました。海外と日本の仏教の違いについても学べ、日本の僧侶の集合体と違い、僧侶と一般の人が集まったサンガを結成しているという事や、上座部と大乗との違いや、国民性の違いによる仏教の考え方についてもとても勉強になると感じました。

(北海道・31年)

○日本の佛教徒、佛教僧への海外からの評価・信頼は無いというお話を聞いて驚きました。具足戒を受けている佛教徒が多い国の人々の方が厳格であるという印象を持っていましたが、永平寺の「毎日の生活を修する」という考え方方が、日本の曹洞宗の特長であるからこのような評価を受けているのかなと感じました。仏教は目の前の人を尊重する、救済する宗教だと思います。そのため、会議においてもぶつかりあうことが少ないというお話を興味深かったです。

(青森県・31年)

○現在の日本の佛教は軽視されている印象だったが、日本の国と佛教はとても密接で、佛教の宗派数、寺院数は世界一ということで、世界的な視点で見ると、大切にされていたんだなと実感した。永平寺に

安居していると曹洞宗の禅について探求してしまいがちだが、世界の視点から見ると佛弟子であつて、佛の教えも布教する力も求められていることが伝わってきた。

(愛知県・29年)

○海外では妻帯について厳しく見ていることを初めて知った。肉や酒については地域性によって認められているのはいいことだと思う。今、世界のあり方が大きく変わって来ている。それに伴い仏教も大きく変わっていく時期だと思う。

(千葉県・29年)

○私は日本の仏教にしかこれまで触れて来ませんでした。中国や台湾の仏教は、日本のお坊さんとほとんど変わらないだろうと考えておりました。戒律を重視するという日本と異なる仏教と寺院とお坊さんのあり方があると分かり、仏教に対する視野が広がりました。

(山口県・31年)

○今回の村山師の話を聞いて、海外で僧侶として活動することは布教という形だけではないんだと知りました。戒律を守っているアジア諸国の僧侶と日本の僧侶とではこれだけ違うにも関わらず、他の国の僧侶と話すときには、仏教という媒体を使いコミュニケーションが取れるというのに、とても興味を持ちました。

(岐阜県・30年)

○この度の貴重なご講義の中で、曹洞宗をはじめとした数々の仏教教団が国境を越え交流を行っている事へ驚きと関心を持ちました。これまで曹洞宗内で国際交流があることは知っていましたが、他宗派とも交流を行っていることを初めて知りました。又その中でもそれぞれの仏教の違いを(超えて)互いに尊重する姿や、その交流の自由さも交流の美しいところであると感じました。上座部仏教と大乗仏教の間の考え方について、もっと否定的なイメージを持っていましたが、自分のイメージ以外の考えが広がっていることで恥ずかしさを感じました。

(静岡県・31年)

○今回のワークショップの講義を聞いて、世界佛教徒連盟や全日本佛教青年会などがあると初めて知りました。青少年におけるブッダの尊い教えへの理解と実践を強化促進し、三宝と両親、先輩それぞれお互いへの尊敬を高めていき、また青少年の平和と調和を促進し、世界佛教徒としての团结力を持ち、思いやりの心と助け合いの心を育むことが出来るという事は、重要な活動だと感じました。将来自分もこのようなことに少しでも関心を持ち、一人の佛教徒として活動してみたいと思いました。

(東京都・31年)

S Z I 主催 海外子弟研修会報告

SOTO禅インターナショナル主催

第5回 海外子弟研修会 in ハワイ 報告

佐藤 慧真 (S Z I 事務局・新潟県興源寺徒弟)



ヒロ大正寺の施食会にてハワイ島のお坊さんたちと一緒に

日系寺院が担ってきた 役割について歴史から学ぶ

本年度で5回目となったSOTO禅インターナショナル主催海外子弟研修会が8月2日(金)より8日(木)にかけて行われました。この子弟研修会は、曹洞宗寺院の子弟等に海外の日系寺院や禅センターなどを視察し現地の人々と交流する事により、曹洞宗の国際布教の歴史と今を学び、それぞれの未来に役立ててもらおうとして毎年企画されているものです。今回は初めてオアフ島からハワイ島まで足を伸ばしての研修となりました。

初日は国際布教師の吉田宏慧師と星野真龍師に出ていただき、オアフ島にある正法寺内に寝袋で1泊しました。特に吉田師には日系人墓地にご案内いただき、ハワイの歴史から日系人と曹洞宗の国際布教の歴史と現状までを説明していただき、大変お世話になりました。

ハワイでは明治元年より日本からの移住が始まり、36年後に曹洞宗の開教が始まっています。日系寺院は、以来信仰の拠点であると共に教育の場としてまた日本の伝統や文化を担う場として大切にされて来たこと、また第二次世界大戦中には多くの日系人が収容所での生活を強いられ、そのような厳しい時代にお寺や僧侶が大切な役割を果たしてきたことなどを学びました。

正法寺の外観はインド風でしたし、他宗派の外観も日本のお寺とはかなり異なっていました。戦争によりアメリカ人なのか日本人なのか日系人がアイデンティティー

を求められていた苦しい時代を経て、正法寺が日本風ではなく仏教のオリジンからインド風建築となったのと同じ、子どもたちは驚いていました。

ハワイ島で大自然と 現地の方々との交流を満喫

2日目よりは飛行機でハワイ島に渡りヒロ大正寺に2泊しました。ヒロではキリスト教会内部にあるラング明心師によるアラネオ禅堂を訪問し、故内山興正老師の御著書を英訳されているトム・ライト師と共に脚を組ませていただきました。見知らぬ者同士最初は緊張していた子どもたちもこの頃には打ち解けて、大正寺では盆ダンスに参加したり施食会にお参りしたり、お斎会場の掃除の手伝いをしたり、積極的にメンバーさん達とも交流するようになっていました。「灯籠流しで御詠歌に参加しては」という住職の畠辰昇師のお声掛けにも答え、しっかりと役目を果たしてくれました。

ヒロからコナへは今なお活動を続ける火山地帯を壮大な自然の息吹を感じながら車で移動し、グライ・ラマも訪れたチベット寺院にも参拝しました。コナ大福寺の法務担当の中出慈光師に迎えられた後は、ウクレレグループによる歓迎会でおもてなしをいただきました。実は前日、返礼のためにフラダンスを披露しようという計画を急遽立てたのですが、子どもたち自ら「ハートストラ」というチーム名を付け、一生懸命練習してくれました。男子の庸道さんには英語での御礼とチーム紹介をしても



ヒロ大正寺の灯籠流しで、急遽御詠歌に参加

らいました。歓迎会はとても和やかな雰囲気で終了しました。

翌日は大福寺の坐禅会のメンバーと一緒に坐った後、朝食会でおもてなしを受けました。コナは欧米人の移住も多くメンバーも様々で、海外寺院における坐禅会の様子を垣間見ることが出来たと思います。その後内田ファームという1994年まで実際に使用されていた日系人の家を訪れ、物を大切にし工夫して生活していた時代のことを学びました。国立ホナウナウ歴史公園ではハワイ王国の歴史を実感しながら、海沿いにある公園でしたので、ハワイならではのピクニックランチを楽しむことも出来ました。夜にはハワイの寺院にしっかりと根付いた和太鼓グループによるレッスンも受けました。

お寺の子同士の横つながりを楽しむ

研修中、子どもたちは説明に熱心に耳を傾け、片言の英語でも一生懸命ハワイの皆さんと交流をしていました。疲れたのではないかと心配していましたが、最終日に空



コナ大福寺で和太鼓のレッスン。英語による指導でした

港で作文を書き終えた後、「本当に楽しかった。」「参加して良かったね！」と元気に感想を述べていました。こうして大変有意義にまた楽しい時間を過ごせたのは、偏に現地の国際布教師、メンバーさん等の多大なるご協力によるものだと思っております。関係者の皆様と本研修会実施にご支援いただきました、両大本山、宗務庁、SOTO禅インターナショナルの会員の皆様に御礼申し上げたいと思います。

ラインのアドレスを交換している姿も見られましたが、これまでの研修会の後特に女子の間で、お寺の子として打ち解け合ったネットワークを楽しんでいる参加者もいるとのことです。本研修が思いもよらないいろいろな意味で、子どもたちの力になっていることを実感させられるエピソードでした。



コナ大福寺のウクレレグループの皆さんと交流を楽しむ

2019年度 第5回 海外子弟研修会日程

8月2日(金)	
成田空港より出発、同日朝ホノルル国際空港着	ハワイ別院正法寺拝登、開講説経、オリエンテーション
日系人墓地	
8月3日(土)	
ホノルル空港よりヒロ空港へ、アラネオ禅堂拝登と坐禅、ヒロ大正寺拝登説経、ヒロ市内散策、盆ダンス参加	
8月4日(日)	
ヒロ大正寺お盆法要、メンバーさんと昼食、片付け手伝い	灯籠流しで御詠歌に参加
8月5日(月)	
ヒロ市内・火山国立公園、ウッドバーテンブル(チベット寺院)経由コナ大福寺へ、大福寺ウクレレグループと交流会、6時より坐禅会メンバーと共に坐禅と朝課と朝食会、うちだファーム、国立ホナウナウ公園見学、和太鼓レッスン	
8月6日(火)	
コナ空港発ホノルル空港経由で成田空港へ	
8月8日(木)	
成田空港着、解散	

引率責任者

佐藤慧真(新潟県興源寺徒弟)

現地案内

吉田宏慧(ハワイ国際布教師 別院駐在)

星野真隆(ハワイ国際布教総監部 書記)

畑 春昇(ハワイ国際布教師 ハワイ島ヒロ大正寺駐在)

中出慈光(大福寺法務担当 ハワイ島コナ大福寺駐在)

参加者

廣澤庸道(神奈川県成願寺子弟・高校2年生)

廣澤莉彩(神奈川県成願寺子弟・中学3年生)

久保井彩日(東京都大泉寺子弟・高校2年生)

小野晶子(山形県洞松寺子弟・高校2年生)

▶第5回 子弟研修会参加者の感想文

私は今回このハワイ研修に二度目の参加だったのですが、前回からまた新たに学ぶことも多く良い経験になりました。前回は日系移民についてや他の宗派との交流について学習出来ましたが、今回はメンバーさんとの距離が近かつたので、ハワイのお寺のかたちを知ることが出来たなど思います。

ヒロ大正寺では盆ダンスと灯籠流しに参加しました。盆ダンスは昨年も正法寺で参加しましたが、大正寺ではJ-Popも踊っていて、中でも恋する「オーチュン・シングツキ」になつた途端に、今まで見るだけだった人も輪の中に集まつて来て踊つていたのが印象的でした。太鼓も、元々の和太鼓だけでなくスネアドラムが混ざついて新鮮で面白かったです。灯籠流しは、日本でも同じ年だとちゃんと知らない人が多いかなと思うのですが、ハワイでもやつ正在していることに驚きました。形が地元のとは大きく違つていて、灯籠が水溶性で溶けるようになつていて、途中までボートで運んでいたり、そのまま海に流れて行くのも新鮮でした。また、大正寺では、初めて英語でのお経を聞きました。英語の方が言葉の意味が分かる部分が多くて面白かったです。外国人の人にも何をしているのか分かるように、でも形を変え過ぎて日本人が寂しい思いをしないようと考えられていて、ハワイならではだなと思つたし、文化の交流を間近で見れて良かつたです。

今回の研修で、ハワイのお寺をより間近で見て、毎週メンバーさんが本堂を掃除したり、大きな行事では積極的に準備をしたり食べ物を持ち寄ったり、一人一人が大切にしているんだと思いました。また、お寺の場所を貸して、太鼓やウクレレや合氣道で使つたり、地域のコミュニティーの場所になつていて素敵だなと思いました。ハワイの人たちがとても温かくてフレンドリーだったので、将来はハワイに住むのもいいなと思いました。

久保井 彩日 (高校一年)

廣澤 莉彩 (中学三年)

私は今回このハワイ研修に二度目の参加だったのですが、前回からまた新たに学ぶことも多く良い経験になりました。前回は日系移民についてや他の宗派との交流について学習出来ましたが、今回はメンバーさんとの距離が近かつたので、ハワイのお寺のかたちを知ることが出来たなど思います。

ヒロ大正寺では盆ダンスは昨年も正法寺で参加しましたが、大正寺ではJ-Popも踊っていて、中でも恋する「オーチュン・シングツキ」になつた途端に、今まで見るだけだった人も輪の中に集まつて来て踊つていたのが印象的でした。太鼓も、元々の和太鼓だけでなくスネアドラムが混ざついて新鮮で面白かったです。灯籠流しは、日本でも同じ年だとちゃんと知らない人が多いかなと思うのですが、ハワイでもやつ正在していることに驚きました。形が地元のとは大きく違つていて、灯籠が水溶性で溶けるようになつていて、途中までボートで運んでいたり、そのまま海に流れて行くのも新鮮でした。また、大正寺では、初めて英語でのお経を聞きました。英語の方が言葉の意味が分かる部分が多くて面白かったです。外国人の人にも何をしているのか分かるように、でも形を変え過ぎて日本人が寂しい思いをしないようと考えられていて、ハワイならではだなと思つたし、文化の交流を間近で見れて良かつたです。

今回の研修で、ハワイのお寺をより間近で見て、毎週メンバーさんが本堂を掃除したり、大きな行事では積極的に準備をしたり食べ物を持ち寄ったり、一人一人が大切にしているんだと思いました。また、お寺の場所を貸して、太鼓やウクレレや合氣道で使つたり、地域のコミュニティーの場所になつていて素敵だなと思いました。ハワイの人たちがとても温かくてフレンドリーだったので、将来はハワイに住むのもいいなと思いました。

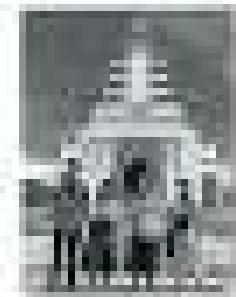
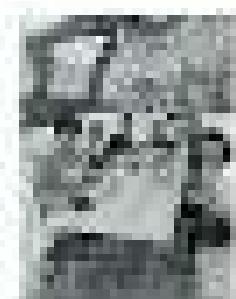
今日は、私は幸運なことに海外子弟研修会に参加することができました。初めての研修会に、とてもドキドキしていました。今回はハワイのオアフ島にある正法寺ハワイ島にある大正寺、大福寺へ行きました。一日目、私たちは正法寺の方達と一緒にオアフ島をまわりました。車でさまざまな場所へつれていってくださいました。遊んだ後でしっかり海外と日本のお寺の違いを学ぶことができました。

一番決定的な違いはお檀家さんとのつき合いの方です。ハワイでは「メンバーさん」と呼ばれていて、お寺ととてもかかわりが深かったです。日本では少ししか話さないイメージですが、ハワイでは其の行事を手伝い食事を持ちよって仲よくしていく交流をたくさんに行っていました。初めて見る光景でした。大正寺や大福寺ではその中に混ざり、食事やウクレレ鑑賞、盆踊りをさせていただきましたが、ハワイの皆さんはとても優しく、フレンドリーでした。おかげで中に交じり、楽しく過ごすことができました。

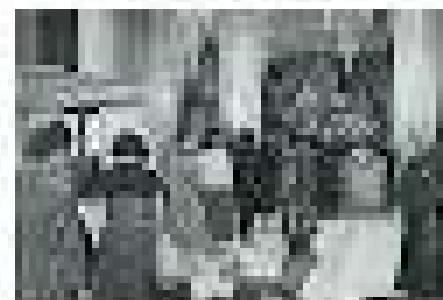
もう一つの違いは本堂の形式です。ハワイでは昔の戦争の出来事によつてキリスト教が少しまじつた本堂でした。そうしたことからもハワイのお寺について学ぶことができました。

二日目からは飛行機に乗りハワイ島へ行き、ヒロの大正寺に泊まり盆ダンスなどに参加しました。印象的なのは太鼓です。踊りながら太鼓を披露していくとてもカッコよかったです。またメンバーさんと一緒に食事をしながら話を聞いて、貴重な体験ができました。

コナの大福寺には「ミチ」というとてもかわいい犬がいます。人なつこく会つたしゅんかんから仲よくなれました。とにかくかわいかつたです。また、お寺で坐禪をしました。早起きは辛かったですが、少し目がさめた気がします。そして住職の慈光さんに車でいろいろな所についててもらい、さまざまなことを勉強しました。



REVIEW *How to Cook Everything* by Mark Bittman



Mark Bittman's new book, *How to Cook Everything*, is a welcome addition to the kitchen shelf. It is a well-organized, comprehensive guide to cooking that covers almost every aspect of the kitchen.

The book is organized into several sections, each covering a specific area of cooking. These include basic cooking techniques, such as boiling, baking, and roasting; specific dishes like soups, salads, and desserts; and special occasions like holidays and parties. The book also includes a section on nutrition and health, which is particularly useful for those who want to make healthy meals.

One of the strengths of the book is its focus on simple, everyday cooking. Bittman emphasizes the importance of using fresh ingredients and avoiding unnecessary complications. He also provides clear, step-by-step instructions for each recipe, making it easy for even novice cooks to follow along.

Another strength of the book is its emphasis on flavor. Bittman believes that taste is the most important aspect of cooking, and he provides many tips and tricks for enhancing flavor through the use of herbs, spices, and other flavorings.

In conclusion, *How to Cook Everything* is a valuable addition to any kitchen. It is a well-written, informative, and practical guide to cooking that is sure to be a favorite for years to come.



Mark Bittman's new book, *How to Cook Everything*, is a welcome addition to the kitchen shelf. It is a well-organized, comprehensive guide to cooking that covers almost every aspect of the kitchen.

The book is organized into several sections, each covering a specific area of cooking. These include basic cooking techniques, such as boiling, baking, and roasting; specific dishes like soups, salads, and desserts; and special occasions like holidays and parties. The book also includes a section on nutrition and health, which is particularly useful for those who want to make healthy meals.

One of the strengths of the book is its focus on simple, everyday cooking. Bittman emphasizes the importance of using fresh ingredients and avoiding unnecessary complications. He also provides clear, step-by-step instructions for each recipe, making it easy for even novice cooks to follow along.

Another strength of the book is its emphasis on flavor. Bittman believes that taste is the most important aspect of cooking, and he provides many tips and tricks for enhancing flavor through the use of herbs, spices, and other flavorings.

In conclusion, *How to Cook Everything* is a valuable addition to any kitchen. It is a well-written, informative, and practical guide to cooking that is sure to be a favorite for years to come.

MARK BITTMAN is a New York City-based author and journalist. He is the author of numerous books, including *The Best Recipes Ever* and *The Best Vegetarian Recipes Ever*.

MARK BITTMAN is a New York City-based author and journalist. He is the author of numerous books, including *The Best Recipes Ever* and *The Best Vegetarian Recipes Ever*.

びに書院・庫裏を拝見し、時代の流れを感じました。その昔、教化研修所海外課程に在籍していた時、山本健善師と共にお邪魔し、五右衛門風呂に入った記憶が鮮明に蘇ってきました。それから、ロサンゼルス禅宗寺駐在開教師で赴任してから現在に至るまで物心両面のサポートをして頂きました。SZIが現在まで存続しているのも、先生のおかげだと思っています。この度、先生ご夫妻のご配慮で、美ヶ原温泉・旅館すぎもとで旧交を温めることができました。改めて、SZIの活動が素晴らしい再認識させて頂いたひと時でした。有難うございました。

福島伸悦(埼玉県長光寺)

● バイオニア精神

この度のSZI REUNION in 松本市廣澤寺結集で改めて法縁の素晴らしさ、国際布教の重要性を再確認させられました。特にこの機会を設けて下さった、恩師であり強力な国際布教師(開教師)サポーターである小笠原先生ご夫妻の御法愛・御配慮に感謝申し上げます。

先生は、私が今から40年ほど前、サンフランシスコ桑港寺の主任開教師として赴任している時、孤立無援?の中、唯一日本時間の真夜中に国際電話(他の開教師の先生方にも)を下さり、励まされ、国際布教の現場状況を国内外に発信しパイプを築いてくれた宗門国際布教(開教)のバイオニアのお一人です。

当時は、特に日系寺院の開教から禅センターの布教展開の過渡期でもありました。今に名を残しておられる当時の各開教地区の個性あふれる、総監、諸先生、禅センターの創始者の諸老師が活躍する時代でもありました。また、移民一世、二世の方々が歴史の流れに翻弄されながらも不撓不屈のバイオニア精神・エネルギーが強烈に感じられた時代であり、正に私の修行原点の場でした。

今ここに至り、洋の東西を問わず各現場は修行・布教道場であり「一箇半箇」の接得を大切にする場であると確信。バイオニア精神、原点を忘れず精進したいと思つております。多謝 細川正善(福島県天徳寺)

● 誰が言われたか『人生は死ぬまで修行です』『和尚は百万遍の發心を死ぬまで続けて生きるのだよ』……とても出来そうもないが常々、心に忘れない様に、我が身に問い合わせて一歩一歩、一日の身命を尊ぶべき思い。一日の行持を大切に愛して生きて行く事が修行なのだと、思いを持って布教生活をしています。

御指導ください。 永井成典(愛知県宝珠寺)

● 節目を寿ぎ

若し叶うならば…と願うのは、女性視点からの「開教史」の編纂である。北米赴任中の印象的な学びは幾つか



有るが、歴史の裏に有る史実の重みもその一つである。

歴史書は常に勝者の遺産であり、後世の権力者や男性の視点に基づく物とも言えよう。

しかし、海外寺院の隆盛や移住者の辛酸には、女性の視点に基づくエピソードこそ語り継がねばならぬ。歴史が漏れていると考える。

一世二世の苦勞が記憶されている今のうちに、總めあげられん事をと切に願って止まない。 不一 大場満洋(埼玉県圓通庵)

● 前略 「SZI 松本Reunion」の企画準備に際し事務局の皆さまに感謝申し上げます。また、小笠原先生ご夫妻のお招きを頂き共に感謝申し上げます。

懇親会を通じ皆さまと共に心温まる会食又各位のご挨拶の法話、説法に心打たれ、笑いと喜びを提供頂きありがとうございましたと、利乃と共に感謝しております。

翌日の上高地も心に残る観光でした。ゴルフ組は晴天の中大会を開催されたそうです。上高地は昔の「山を登る」上高地から「観光地上高地」へ変化していました。我々は晴天と思いながら、山の天気は常に激しい変動の中に有る事を改めて経験させられた空間でした。雨と風、台風のような中、先生主催によるホテルでのコースランチを8名で楽しく、美味しい頂戴致しました。小笠原先生ごちそうさまでした。

1993年2月の創立以来、多くの国際布教教化関係者の皆さまと深いご縁を頂き心より感謝申し上げます。共に未来へ向け更なる前進が出来る事を念じてご挨拶と致します。どうぞ、今後共宜しくお願い致します。 合掌 月出俊典 & 利乃(静岡県重林寺)

● 会報60号おめでとうございます。設立当初の3つの目的から時代の流れとともに少しずつ臨機応変に対応していくことがSZIの素晴らしいところであると考えています。上下前後にこだわらず和合衆として将来につなげてください。 篠田一法(愛知県長松院)

● 2014年まで南アメリカ国際布教総監部ローランジャ佛心寺にて布教と護持をいたしておりました静岡市の増善寺住職黒澤慈典です。帰国して早くも4年が経ちました。小笠原隆元先生の温かなるご厚意により、初めてSZIの親睦会に参加させていただきました。これから時世における日本での布教の在り方、寺院の在り方を、今までの北米やハワイでの主に日系社会における寺院の状況を、国際布教の諸先輩方と話をすることができました事を感慨深く思いました。今後の寺院護持といったテーマも踏まえて、定期的に親睦会や行事を行って頂ければ幸いです。今回は小笠原先生をはじめ、多くの宗門国際布教に携わってこられた諸先輩方に感謝いたしております。 合掌 黒澤慈典(静岡県増善寺)

● このたびは、SZI会員でないにもかかわらず、参加をさせていただき、誠にありがとうございました。特に小笠原隆元先生には、幾度となくお電話をいただき、また交通手段のことまで心配してくださいり、この紙面をお借りして改めて御礼を申し上げます。これを機会に、SZIのかたがたとも更に交流を深めていければと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

伊藤祐司(高知県願成寺)

● 答えは海外寺院にある

世界各国から押し寄せる観光客や日本で働く外国人、ラグビーワールドカップ、2020オリンピック・パラリンピック等、世界の人々と共生する社会構造が急速に進み戸惑いすら感じる社会環境となりました。さらに外国人の定住に伴う課題や国内の核家族・少子高齢化・過疎化等は、お寺の存続に関わる大きな問題を含みます。人種・言語・宗教・文化等が異なる地で展開する曹洞宗の海外寺院には、当初から日本が抱える課題に直面し、乗り越えてきた歴史と対処方法により極めて重要な情報が蓄積されました。海外布教で得た情報と社会的帰結をさらにフィードバックする事は、日本での課題解決に向けた一助になると確信します。日本のお寺にとって海外寺院は「アンテナ・ショップ」の要素を持つと言って過言ではないからであります。

飯島尚之(東京都宗清寺)



● 教化研修所で小笠原先生の授業を受けて以来、曹洞禅の国際布教に学び関わらせていただいて今年還暦です。皆様に大変お世話になりました。現在、先代が創立した幼稚園で国際バカロア(I B)教育に取り組んでいます。世界の先端を行く教育法の一つですが、そこには西欧で広がった佛教の影響が私には感じられます。また、文科省が今行っている教育要領改訂は明治以来最大の教育改革と言われておりますが、内容的に見て、そこに影響を与えたのがI Bだと思っています。この感受性を私に与えてくれたのが他ならぬ国際布教の現場でした。この立場から今後の布教活動に少しでも貢献できればと考えております。 黒柳博仁(長野県天周院)

● 小笠原先生のご厚意により、久しぶりに国際布教師OBの皆さまとお話し出来、とても楽しい時間を過ごせました。懐かしい話の中で、当時はインターネット等がまだ普及しておらず、現地の情報が入手できず不安だったことを思い出しました。現在は、日本に居ながら諸外国の情報が入手できます。しかし、それは単なる知識であり、実際に体験することとは全く別のことでしょう。若い人に実際の海外寺院を体験してもらいたいと思いました。関心のある方は事務局までご連絡下さい。合掌九拝 淺井宣亮(愛知県地蔵寺)

● 冠省 SZIの事務局方々にはお世話になっております。大変遅くなりましたが、申し訳ございません。台風19号の被害で、福島県本宮市の檀家さんが約326軒水害に遭い、今のところ200軒くらい、お見舞に回っております。まだ120軒以上お見舞に回らなければなりません。また、お檀家さんの中で、1人溺死された方もおります。大変な事になっており、水害に遭われた方のことを考えますと大変心が痛みます。復興するには今年いっぱいはかかるかと思います。

話は変わりますが、長野県松本市の廣澤寺様を拝観致しましたが、伽藍、会館など大変大きく驚き、小笠原隆元老師の偉大な指導力を感じられました。寺報などを送つて戴き、拝読させて戴いておりますが、いろいろな行事を

行っており、大変参考になるのですが真似ができないのが、小笠原先生の凄さだと思います。またSZIの方々が私の寺の周りにいないので助かっております。近くおりますと比較されてしまい、檀家さんから、いろいろ宿題を出されてしまいます。細川老師が福島県の猪苗代においては、福島民友新聞などで、五百羅漢さまの祭礼や胡弓の演奏会など行っていますが、その記事が新聞に載りますと、また檀家さんから宿題を出されるのは、とザワザワしてしまいます。今のところ宿題を出す方がおりませんのでどうにか過ごしております。今のところはお寺のことより、水害被害の問題が大きいようです。草々
葉貫成悟(福島県石雲寺)

● SZIは1993年に発足してから四半世紀が経過しました。これまでの活動により生み出された1つに、国際布教師・寺族・関係者の皆様方が築きあげてこられた足跡を記録した『曹洞宗海外日系寺院史』の発刊があります。今年、松本・廣澤寺様においてREUNION 2019年結集に参加して、改めて感じたことは、この寺院史は、小笠原隆元老師が収集、整理した膨大な資料無しには恐らく完成なかっただろうということでした。編集作業の際に何度か廣澤寺様へお邪魔し、資料をデータ化する作業をさせていただいた際も、快くお迎えいただいたことを思い出します。歴史的資料は、「記録されたものしか記憶されない」という言葉がありますが、裏返せば「記録されなかつたものは記憶されない」ということです。そのことを改めて感じることができた2019年結集でした。末筆ではありますが、結集の準備を行っていたREUNION事務局の皆様、そして何より小笠原隆元老師ご夫妻に心より感謝申し上げます。
亀野哲也(神奈川県貞昌院)

● ハワイにて布教活動に従事させていただいたのは、もう一昔前。時の経過は、早く、時も刻々と様相が変化している昨今、田宮会長老師にお声をかけていただき、帰国後12年の歳月が経過した後、SZIの活動をお手伝いさせていただいている多様性の時代を迎えていた現在の日本、今、この時が他国、他民族、異文化の国に曹洞宗を広げた国際布教活動の経験値が活かされるのは?を感じています。SZIの今後の活動がさまざまな変化に対応できる曹洞宗の一助となれば幸いと感じています。

水野克彦(静岡県新豊院)

● SZIは私が大学生の頃に創立されて、最初は自分の師匠やその年代の方が海外で布教活動を終えて日本に帰国してからの同窓会的な団体だという印象でした。しかし2013年に自分自身が海外での布教活動を終え日本に帰国し、田宮会長からお声をかけて頂きSZI事務局を

お手伝いするようになりました。そこで宗務庁国際課と一緒に海外の寺院や禅センターの布教活動をサポートしたり、日本との繋ぎ役をしていると分かりました。そして子弟研修や両大本山ワークショップを通して次の世代にも繋ぐことに貢献しています。子弟研修や両大本山ワークショップに参加したのをきっかけとして、皆さんのが将来日本でも海外でも活躍することを期待しています。

大山健治(山形県清龍寺)

● 会計とwebsite担当の内山温子です。紙面交流の場のことなので、お知らせします。寺族さんや師弟の皆さんでご関心ありましたら、ぜひご連絡下さい♪

【演奏会出演日程】4/24 山形県 文翔館、4/25 新潟県 だいしホール、4/27 東京都 西東京音楽堂、11月は富山と長野、愛知を予定しています。
内山温子

● おかげさまで会報も60号に! ご愛読ありがとうございます。いつものご協力にも感謝申し上げます。REUNIONでは廣澤寺様に大変お世話になりました。さて、私の近況報告をいたしまして、ミステリー小説を書いておりますので、是非ご覧ください。『如雲庵殺人事件—施術師木村雪乃が集めた証言』殺したのは本当に庵主様なのか? 境内ですり泣くひな人形のような美女は誰? 小説投稿サイト「エブリスタ」にて如雲庵殺人事件で検索してみてください。新潟ブログではパレエ小説『ジゼル』も完結!
佐藤慧真(新潟県興源寺徒弟)

動 静 報 告

2018年12月～2019年11月

1月18日(金)	
役員会	(檀信徒会館 梅の間)
2月12日(火)	
総会(檀信徒会館 菊の間)、懇親会(ブランコ)	
7月10日(水)	
役員会	(八重洲 スペイシー)
8月2日(金)～8日(木)	
海外子弟研修	(ハワイ)
9月3日(火)	
大本山総持寺ワークショップ	(大本山総持寺)
9月5日(木)	
大本山永平寺ワークショップ	(大本山永平寺)
10月3日(木)、4日(金)	
SZI REUNION (松本廣澤寺、すぎもと旅館)	
11月14日(木)	
編集会議	(ISO八重洲)
なお、随時インターネットで役員会を開催いたしております。	

… 海外レポート① …

両大本山南米別院佛心寺 南アメリカ国際布教総監部 60周年記念慶讃法会

佐藤 鴻舟(富山県明禪寺住職)

この度、曹洞宗両大本山南米別院佛心寺に於いて11月22、23、24日の三日間に渡り、曹洞宗両大本山南米別院佛心寺創立並びに南アメリカ国際布教総監部開設、60周年記念慶讃法会が修行されました。

法要は、60周年慶讃法要導師として宗務庁教化部長喜美候部謙史老師を始めとし、大本山總持寺監院乙川暎元老師、大本山永平寺副監院武内宏道老師を迎え、更には約70人の隨喜僧侶並びにサンパウロはもとより、南米各地からも沢山の信者が参加する中で行われました。

初日の22日には瓊仙堂除幕式、薬師瑠璃光如来像開眼供養、放光室除幕式、涅槃軸開眼供養、三界萬靈塔開眼供養、盡光苑除幕式、盡光地藏菩薩像開眼供養、盡光苑モニュメント除幕式などが行われました。二日目の23日には、慶祝転読大般若祈持、可睡齋主佐瀧道淳老師を導師として開山歴住報恩誦経、開山歴住塔前訓経、法話、万燈供養が行われ、三日目の24日は南アメリカ国際布教物故者供養、60周年慶讃法要、南アメリカ国際布教総監采川道昭老師を導師として檀信徒総回向が修行されました。

これらの法要で印象深かったのは、22日の盡光苑除幕式です。盡光苑の入口に立てられた三界萬靈塔には、草木花鳥魚族畜靈塔等と彫られています。とても分かりやすい三界萬靈塔です。私達が生かされてお世話になっているこの世界の全ての者への感謝報恩の塔となっています。その塔の前を通って門を潜り階段を下りると、左側奥には彫刻家の豊田豊氏作の「宇宙の星」と題されたモニュメントが置かれています。「モニュメントの円形の鏡は魂、太陽であって、自然界に生きる万物はすべて太陽からの恵みであり、光を受けて生きている。



大般若祈持

ここには三次元の時空である植物、動物、昆蟲、魚、生きとし生けるもの(がいて)、宇宙の萬物は全てこの地球で生まれそして死ぬ。また、一緒に置かれている水の形体は60周年的佛心寺の足跡を表現したもので、未来へ伸びる波の姿を現したもの。」と、豊田氏の説明がありました。苑を守っているのは同日開眼供養された盡光地藏菩薩です。

この大都市サンパウロでもコンドミニアムが増えていました。それと共に各種のペットも増えています。ペットと共に生活するうちにそれはペットではなく家族と変わっていくのは何処の国も同じであって、その最終を供養してあげたいと思うのもまた同じではないでしょうか。サンパウロ市内の沢山の広場や公園には多くの木が植えられており、近所の人達が小鳥の鳴りを聞きながらのんびりとペットを連れていっている所もよく見受けます。あらためてこの盡光苑の意味合いを感じる事が出来ました。

歴代総監の時代にも日々の苦労がありました。総監と共に僧侶と檀信徒がたがいに他を敬いながら協力し合い佛心寺を60年支えてきたように、これからも新しい世代にも佛法僧の教えが伝え続けられる事と信じています。



ブラジル国内外約70人の隨喜僧侶が参加

… 海外レポート② …

三心寺近況

おくむら じょうはく
奥村 正博 (米国三心寺住職)

今年の眼蔵会の様子

2003年6月、三心寺がインディアナ州ブルーミングトンに建立され、家族と共に移転し、同年9月から活動を開始しました。2005年2月には、曹洞宗宗務庁より海外寺院として認可され、首座を置いた夏期安居を行うことが出来るようになりました。2018年には創立15周年を迎えることが出来ました。

創立の時に願っていたのは、本師内山興正老師によって示された、坐禪と、宗乗の参究、そしてテキストの翻訳を中心とした道場にする事でした。三心寺創立以前のものも含めれば、すべて共訳、共著ですが、20冊近くの翻訳や解説書を作ることが出来ました。継続的な道元禅師の教えの参究、宗乗の理解に必要な仏教や禅一般についての勉強を、リトリート中の講義や、眼蔵会、日曜参禪会、水曜日の勉強会などを通じて行ってきました。只管打坐の行に基づいた、宗乗の実践的な理解を目指しております。

これらの宗乗参究の活動を組織化するために三心禪コミュニティ内にDogen Instituteを立ち上げました。私の講義のトランクリクレーションや、それをもとにして本を作る編集作業などをさせていただくボランティアの活動をオーガナイズするのが主な活動でしたが、昨年の15周年の際には、私と弟子たちの「誓願」についての文集と、内山老師の「生死法句詩抄」の英訳に私の弟子の写真を添えたものを出版しました。現在、2人のアメリカ人国際布教師の方に執筆をお願いしております。また最近、DIで制作した子どものための絵本がWisdom社から出版される事になりました。これらの活動の成果として、海外における曹洞禪の教學の振興、教化に役に立つ資料を作成していく所存です。現在、秋葉玄吾北アメリカ総監老師がカリフォルニアに天平山僧堂を建立するために奔走されておりますが、将来僧堂としての活動が始まった時に使っていただけるような教材が出来

るようになると願っております。

毎年、夏期安居の最後に行う禅戒会では、これまでおよそ100名の人たちが受戒して仏弟子になりました。また、24名の人が出家度を受け、あるいは転師して私の弟子になり、そのうち12人が伝法を完了しました。その中にはアメリカ合衆国だけではなく、南アメリカやヨーロッパで自分のサンガを持つ人たちもあります。

眼蔵会は最初の頃は、参加者も10名足らずでしたが、次第に参加希望者が増えて、いつも何人かの人にウェイティング・リストに入らなければならぬ状況でした。それで、11月に行った眼蔵会はブルーミントン市内にあるTMBCC (Tibetan Mongolian Buddhist Culture Center) の施設を借りて行いました。三心寺で行うには禅堂や宿泊施設などに限界があり、22名が受け入れの限度ですが、今回は50名近くの参加がありました。TMBCC内で宿泊する人たち、三心寺の禅堂やドームで宿泊する人たち、市内のB&Bなどに宿泊して通う人たちと様々でした。アメリカ国内の西海岸、東海岸、ミネソタ州、フロリダ州などの遠隔地のみならず、カナダの人、ヨーロッパのドイツ、オーストリア、オランダから4人の人たち、また昨年の11月の眼蔵会に引き続いで4人の曹洞宗のお坊さんたちが日本から参加されました。

私は75歳になる、2023年6月には三心寺住職から退任する予定であります。その年は三心寺の創立20周年であります。数年前にそのことを公表し、後継者として弟子の法光Karnegiが副住職に就任しました。今年の夏から、法光が接心を指導することになりました。私も坐りますが、住職の職務としてはなく、一参禪者としての坐禪です。現在では三心寺のほとんどの活動は法光が中心になってやってくれています。私はおかげで、講義の準備、執筆活動に集中することが出来るようになりました。



各国から集まつた参加者と奥村老師

… 海外レポート③ …

風化させてはならない記憶

なかでじこう
中出慈光 (ハワイ・コナ大福寺)The Power of Remembrance
by Jiko Nakade

Daifukuji Soto Mission

September 9, 2019

As a child, I often gazed at the portraits of my grandparents which hung on the wall of my living room in Kona, Hawaii. My grandparents Kanesaburo (兼三郎) and Matsu (マツ) Oshima, who had emigrated to Hawaii from Nagano, Japan in the early 1900's, both died before I was born. I had never known them, but, seeing their portraits day after day had etched their faces into my mind.

Grandfather Kanesaburo was a businessman who owned a store and a small taxi business in the town of Kainaliu. He and my grandmother had 11 children. Life was difficult for them; like other issei, they worked from morning until night in their struggle to survive in a foreign land.

My grandparents were gentle, honest folk, whose lives changed suddenly the day Pearl Harbor was attacked. Around midnight on December 7, 1941, while his children were asleep, Grandfather was picked up by the police and taken to the Kilauea Military Camp on Hawaii Island. There, he was detained, together with all of the Buddhist priests on the island, who had also been arrested for no reason other than holding positions of influence in their Japanese communities. From KMC, they were sent to Sand Island, Oahu, where they suffered harsh and inhumane treatment.

Later that year, Grandfather found himself among 700 Japanese immigrants detained behind a barbed wire fence at Fort Sill, Oklahoma. Among the 700 were nearly 90 Buddhist priests from the Jodo Shinshu, Jodo, Zen, Nichiren, and Shingon sects. Thousands of miles away from home, Grandfather

worried incessantly about his wife and children and wondered if he'd ever see them again.

According to what I was told by Rev. Gyokuei Matsuura, a Hawaii Soto Zen Buddhist priest who was there, on May 12, 1942, Grandfather was playing a game of hanafuda with some friends when he suddenly dropped his cards and began walking toward the fence, muttering "I want to go home. I want to go home." His friends yelled to the guards standing in their towers, "Don't shoot, he's lost his mind. Don't shoot." Unarmed and innocent of any crime, Grandfather was shot in the back of his head. The ninety Buddhist priests conducted a funeral service for him and for three others who also died in that camp. After WWII ended, my father, Noboru Oshima, the eldest of the eleven Oshima children, went to Oklahoma to pick up Grandfather's ashes and bring his urn home. His grave is at Daifukuji Soto Mission.

It's possible that Grandfather's tragic story would have been forgotten over time. However, on July 20 of this year, he was remembered by a group of 25 Buddhist priests and lay leaders, who assembled in Lawton, Oklahoma and marched in their robes in the 102-degree heat with nearly 400 other protestors who were there to protest the imminent confinement of up to 1,400 asylum-seeking children from Central America who had been separated from their parents and who were to be sent to Fort Sill.

A Japanese American organization called Tsuru for Solidarity organized, as part of the protest, a memorial service for Grandfather and the others

who died while interned at Fort Sill. The service was organized under the guidance of Rev. Duncan Ryuken Williams, a Soto Zen priest and scholar of Buddhism, and author of the newly published book American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War.

At the Fort Sill gates the Buddhist priests quickly set up an altar and chanted the Heart Sutra, led by Rev. Shumyo Kojima of Zenshuji in L.A. Placed upon the altar was a photo of my grandfather, a Buddha statue carved in 1943 in an internment camp at Manzanar, and three maile leis, sent from my Oshima family in lieu of a floral arrangement. The leis, an offering of peace, were then draped on a cannon by Rev. Ryuken Williams and Rev. Wendy Egyoku Nakao, abbot emeritus of the Zen Center of Los Angeles.

Later that day, a second memorial service and rally were held at the Shepler Square Park. Once again, my grandfather's photo was placed on the altar. It was a moving ceremony which can be viewed on YouTube: <https://www.youtube.com/watch?v=i3GbRteuoLM&feature=youtu.be>.

It was with much regret that I was unable to fly to Oklahoma due to my duties at Daifukuji. The photos and videos of the protest which were shared with me moved me to tears and made me aware of the deep inter-generational suffering carried in my heart and in the hearts of the members of my Oshima family. It moved me to know that my grandfather became the "face of injustice" and that his death, a reminder to all that forced, unjust removal and incarceration must never happen again.



フォート・シルの入り口の前に作られた臨時の祭壇



中出慈光師の曾祖父、大島兼三郎さん

Following the Fort Sill protest, on July 24 it was announced that plans to move the migrant children to Fort Sill were put on hold.

In my message which was read by Rev. Nakao at the memorial service held in Oklahoma, were these words: Your courage and your compassion have the power to transform ignorance and prejudice into awareness and wisdom. Thank you for being here for those who are suffering and for those whose voices are not being heard.

At the end of my essay, I'd like to thank/credit Rev. Duncan Ryuken Williams for the information on the Fort Still Protest which he shared with me.

His full-length essay can be read online on his website: <https://static1.squarespace.com/static/5ba3e3df1516ba05fbbe1801/t/5d43e10993affd00012292f0/1564729734827/Duncan+Ryuken+Williams+July+20+Fort+Sill+Report-v0802.pdf>.

Or, <https://www.duncanryukewilliams.com>.



左がダンカン隆賢師

【翻訳】 「風化させてはならない記憶」

コナ大福寺 中出慈光

私は子どもの頃、生まれ育ったコナ・ハワイの家の居間に掛け合っていた祖父母の写真をよく眺めていた。私の祖父母、大島兼三郎とマツは1900年代初頭に長野県よりハワイに移住し、私が生まれる前には他界した。実際に会ったことのない祖父母ではあったが毎日のように写真を眺めていたので祖父母の顔は私の脳裏に刻み込まれていた。

祖父はコナのカイナリウという町で商店と小さなタクシー事業を営んでいた。祖母との間には11人の子どもがいた。当時の移民が誰しもそうであったように、生活は苦しく、異郷の地で生きていくためには朝から晩まで働くしかなかった。

祖父母は正直で穏やかに暮らしていたが、真珠湾が攻撃された日に生活が一変した。1941年12月7日の深夜、子ども達が寝ている間に祖父は警察に連行されハワイ島にあるキラウエア米軍キャンプへ収容された。そこには地元日系人社会において責任のある立場にあるというだけで連行されたハワイ島内の仏教僧侶も全員拘留された。キラウエア米軍キャンプからはオアフ島のサンドアイランドへ移送され、そこでも非人道的な厳しい扱いを受けた。

さらにその年の暮れ、祖父は他の日系移民700名とともにオクラホマ州の有刺鉄線で囲まれたフォート・シルに移送された。フォート・シルに収容された700名のうち浄土真宗、浄土宗、曹洞宗、日蓮宗、真言宗の各州の僧侶が約90名いた。ハワイの家族から数千キロも離れ、祖父は家に残した妻や子ども達のことを絶え間なく思い、二度と会うことのないのではないかと心を痛めた。

当時祖父とともに収容されていたハワイの曹洞宗開教師、松浦玉英師によれば、祖父は1942年の5月12日に数名で花札遊びをしていた際、突然手に持っていた花札を落とし「家に帰りたい、家に帰りたい」とつぶやきながら、壁に向かって歩き出したそうだ。仲間の数人が監視塔に立っている兵隊に向かって大声で「撃つな。撃つな。彼は気がおかしいのだ」と、叫んだという。武器一つ持たず、それまでには何一つ罪を犯したことのない祖父は後頭部を撃たれ、命を落とした。祖父の葬儀は同じ頃にフォート・シルで亡くなった日系人3名と共に、90名の僧侶によって執り行われた。祖父の長男であった私の父、大島登は、第二次世界大戦終結後にオクラホマへ行き祖父の遺骨をコナへ持ち帰った。祖父の墓は現在もコナ大福寺に建っている。

時間の経過とともに祖父の話が忘れられてしまうのも致し方ないことではあると思う。ところが、今年の7月20日に25名の仏教僧侶とリーダーを含む約400名によりオ克拉ホマ州のロートンで祖父とフォート・シルで亡くなった他の数名の追悼法要が、摂氏38度を超える猛暑の中行われたのである。この追悼法要は、不法在留が疑われる中米出身家

族の子どもたちが親元から引き離され、数十年前に日系人が収容されたこのフォート・シルに移送拘留されるという差し迫った状況に対する抗議活動の一環として行われたのである。

この抗議集会は、アメリカ日系人によって構成されているTsuru for Solidarityという団体によって行われ、抗議活動の一環としてフォート・シルで収容中に命を落とした方々の追悼法要が行われたのである。この追悼法要は曹洞宗僧侶で学者であるダンカン隆賢師を中心に執り行われた。因みにダンカン師の著書に「American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War」がある。

フォート・シルの入り口には臨時の祭壇が設けられ、LA禪宗寺国際布教師の小島秀明師を総理に般若心経が唱えられた。祭壇には祖父の遺影とともに1943年当時にマンザナー収容キャンプで彫られた仏像、そして花の代わりにはハワイの大島ファミリーから届けられたマイレのレイが供えられた。読経の後、平和を表すマイレのレイはダンカン師と元LA禪センター主任のナカオ恵玉師によってゲート前におかれた大砲の筒にかけられた。

同じ日に二度目の追悼法要と抗議集会がシェブラー・スクエア・パークにおいて開催された。再び祖父の遺影が祭壇に祭られた。この法要はとても厳かなもので、youtubeで見ることもできる。

私は大福寺での任務のため、残念ながらオクラホマでの法要と集会には参加することが出来なかつた。しかし、集会の写真や動画を見て私の心は大きく動かされ、涙を流さずにはいらなかつた。私の、そして大島ファミリーにとって、私達が世代を超えて抱えてきた苦しみがいかに大きなものであったのか気付かされたのであつた。私は祖父が当時、不当・不平等の最前列に立たされ、その死が、二度と不法で強制的な収容や投獄がなされてはいけないことへの盾となるべきだと強く思つた。

因みに、この抗議集会が開催された後の7月24日、フォート・シルへの子ども達の収容は見送られた。

オ克拉ホマ州における追悼法要の当日、ナカオ恵玉師によつて読みあげられた私のメッセージの一部を紹介する。「あなたの勇気と限りない優しさは無知と偏見を自覚と智慧に変える力があります。いま、苦しみの渦中にいる人々と、声にならない声を叫んでいる全ての人ため、ここに立っていることに感謝します。」

youtube動画サイト <https://www.youtube.com/watch?v=i3GbRteuoLM&feature=youtu.be>

写真等の提供

フォート・シル関連・並びに写真2点 ダンカン隆賢師
大島兼三郎遺影1点 大島ファミリー

ダンカン隆賢師ウェブサイト

<https://www.duncanryukewilliams.com>

… 海外レポート④ …

海を越えて学ぶ「梅花のこころ」

まつ い りょう こう
松井 量 孝 (千葉県新井寺副住職)

本年2月14日から24日まで、ハワイ国際布教総監部様管内における梅花流詠讀歌講習会のご縁をいただきました。

2月14日夜、成田空港を出発し、オアフ島ホノルルへ。到着後、「ハワイ国際布教総監部」がおかれている曹洞宗両大本山ハワイ別院正法寺様を拝登し、駒形宗彦総監老師にございさつをいたしました。総監老師には、ハワイの日系移民や曹洞宗布教・寺院の歴史、暮らし・文化、寺院の活動や檀信徒との関係など、多岐にわたるご教示をいただきました。

仏教の源であるインド、信仰の土壤である日本、ハワイがみごとに調和された正法寺様のご本堂には、ハワイでの日本仏教の展開を垣間見た気がしました。

ハワイにおける梅花流は、1952年の高祖大師七百回大遠忌の折、訪日された松浦玉英師が誕生したばかりの梅花流詠讀歌の録音(野村秀明師範と熊倉実參師範によるお唱え)を持ち帰られたことを端緒とし、1955年には、曹洞宗梅花流正法教会にハワイ支部が登録されました。

今回の講習会は、ホノルルから飛行機で約1時間のハワイ島コナの大福寺様からはじまりました。

大福寺様では、1日目は「三宝御和讃」と法具の扱い、作法を初心者の皆さんと学びました。翌日は、オールメンバーで「三宝御和讃」、「枳尊花祭第一番御詠歌(歓喜)」、立行を勉強しました。大福寺様には、ハワイ梅花流初期の頃からの講員様がいらっしゃり、はじめての巡回講習や梅花流を伝えにくために必死で学んでこられたお話をうかがいました。

つづいて向かったのがヒロの大正寺様。大福寺様から車で約3時間。車窓からのコーヒー烟や海の美しい景色が心に残っています。大正寺様の開講式では、日本語と英語での「お誓い」に新鮮な感銘を受けました。講習では、立行作法を確認し、「枳尊花祭御和讃」、「大正寺御詠歌」、「聖号」をお唱えしました。ウクレレ演奏による日本語と英語の「まごころに生きる」や坐禅会に参加させていただいたことも貴重な思い出です。



ヒロ大正寺 梅咏读歌ワークショップ開講式

オアフ島では、大陽寺様と正法寺様を会場に、2日間にわたりて講習をさせていただきました。こちらでも検定会が開かれ、作法と検定曲目を中心で勉強しました。最後に、昨秋に亡くなられた総監老師の奥様に「追善供養御和讃」を全員でお唱えさせていただきました。滞在中、皆さんの総監老師の奥様への深いお気持ちに接し、わたし自身はお目にかかることはかないませんでしたが、慕られた敬慕の念をお届けしたいと思ったのです。

最終日は、日頃ご指導をされている師範(宗侶)・詠範(ご寺族)の講習。ハワイでの講習をあり返り、改めて詠唱・作法の基本的な留意点を確認しました。最後に、滞在中の深い感謝の気持ちをお伝えし、閉講となりました。

語学力や海外経験も乏しく、師範としても和尚としても人間としてもすべてが未熟な自分を思うと、未知の世界への不安は募るばかりでしたが、実際に出会ったハワイの皆さんは、親切であたたかい笑顔の方々でした。オリジナルのすみれ色の梅花服もすてきでした。メンバーサン(講員様)の大半は日系の方ですが、90歳を超えた方も多いことに驚きました。日本語の浸透率はそれぞれで、慣れない英単語と片言の英語を用いての講習では、さまざまな学びと気づきをいただきました。

念いをもって熱心に詠讀歌に向き合われるお姿は、日本の講員様と何ひとつ変わりませんでした。「集うたのしさ」と「お唱えする悦び」がありました。正しい詠唱と作法を学びたいという真剣なお気持ちを感じました。また、家族のようにメンバーサンと接する宗侶やご寺族には「寄り添う」ということを学ばせていただきました。

貴重なご縁に改めて感謝しております。ご縁をいただいたすべての方々に御礼を申し上げたいと思います。この学びと法悦を励みとし、さらに研鑽を重ねてまいりたいと思います。そして、アロハの国への再訪とオハナとの再会の機会を念じています。

合掌



コナ大福寺 梅咏读歌ワークショップ

… 海外レポート⑤ …

北アメリカ国際布教総監部の現職研修会に出講して

すが わら けん しう
菅原 研州 (愛知学院大学准教授・宮城県城国寺副住職)

今年で3回目となる北アメリカ国際布教総監部の現職研修会に出講いたしました。これまで5月末に開催されておりましたが、今年は9月初めということで、大学の夏休み期間中に行われました。

テーマですが、ここ2年間は、「宗門の御袈裟について」「宗門の伝法式行法について」と題してお話しさせていただきましたが、今年は「宗門の授戒会について」としてお話しいたしました。

理由ですが、2021年にロサンゼルス禪宗寺を会場に、現地のメンバーを対象とした授戒会を開催したいそうで、主要な配役を担当する予定の国際布教師の方が、既にフランスや日本で行われている授戒会に随喜し、研修を重ねています。20年ほど前に禪宗寺で授戒会を行った際には、主要配役を日本から来た僧侶が行ったそうですが、今回は明らかにその状況が異なります。よって、今回の研修では、改めて宗門における授戒会の歴史や、作法についての教学的意義などを確認したいということで、現地時間の9月4・5日に禪宗寺を会場に講義いたしました。

それで、こちらとしても、アメリカの皆さんは何を聞きたいのかを事前にリサーチしたのですが、そこで大きな問題があると気付かされました。特にS Z I会員の諸老師でしたらご存じの方が多いとは思うのですが、現地で「JUKAI」といえば、日本でかつていわれていた「在家得度式」のような作法を指しているのです。つまり、「JUKAI」とは、参禪に来ていた人に縁子などを縫ってもらい、それが出来たら、裏書きをしつつ授戒を行なうのです。

問題は「JUKAI」と「授戒(または授戒会)」について、その違いを明らかにすることと、後者の重要性を説くことになります。

そもそも、宗門における「在家得度式」とは、第二次世界大戦後、各寺院での教化を進めるために、一住職が篤信の檀信徒を対象に行なうものとされ、昭和25年改定の「高僧修訂曹洞宗行持規範」で明文化されました(一説には、西日本の寺院から明文化を希望していたともされます)。しかし、昭和42年の改訂で同作法は削除されてしまい、現代では道元禪師の「しかあればすなはちるべし、得度といふは、出家なり」(『正法眼藏』「三十七品菩提分法」卷)という教えと矛盾するため、「得度」とは「出家」のみを意味するようになりました(近年「寺族得度」が停止されたのも同じ理由です)。

しかし、何故、北米に「JUKAI」が残ったかといえば、鈴木俊隆老師(1905~1971)の渡米時期(1959年)と無縁ではないといえましょう。ちょうど鈴木老師の渡米時期は、宗門で「在家得度式」が明文化されていた時期と一致します。それに、日本であれば出家得度を行い、宗務庁に僧籍の登録を求めるることは容易ですが、北米で当時、それが何んらしい状況であったとすれば、「在家得度式」の方がむしろ状況に契っていたといえましょう。

問題は、この後で、如何にして「授戒会」の重要性を伝えるかです。「在家得度式」と「授戒会」との決定的な違いは、「加行の莊嚴さ」と「参加人数の多寡」となります。それ以外は、思つ

たより大きな違いがありません。例えば、一番重要だと思われる「血脉」や「戒名」を授けることは共通しています。そのため、「JUKAI」ではなく、大変な準備や労力が必要な「授戒会」を行う必要性を明示することは難しいのです。「在家得度式」は、「加行」が行われずに作法のみ行います。よって、5~7日間で行われる「授戒会」の加行の莊嚴さは、宗門内における他の法要と比べるべくもないほどであります。また、その意義について、江戸時代の學僧・面山瑞方禪師(1683~1769)は以下のように指摘します。

・この懺悔の一七日の加行とは、「梵網經」「瓊珞經」という二経の説において、過去・現在の罪を消滅させるために、諸仏を礼拝するのである。

・この一七日の懺悔によって、一切の罪や修行への障りが消滅しないということはない。仏説を疑ってはならない。

「若州永福和尚說成」下巻「加行の因縁」項、訳は菅原

つまり、一週間の加行を通して、自らの罪を懺悔すれば、正しく菩薩戒を受けることが可能となるのです。また、上記の面山禪師は批判するものの、現行の宗門授戒会における「懺悔道場」の莊嚴さは、懺悔帳換却などの作法により、戒弟子に対して罪の消滅を可視化するという意義があります。また、「正授道場」中の「四衆登壇」なども、仏弟子の仲間入りという意義としては、我々の記憶に残りやすい作法となっております。これらはともに、「在家得度式」にはないものです。

一方で、参加者の人数の多寡も、大きな違いです。戒弟子はもちろんのことですが、今回は主催する僧侶側への解説でしたので、集まつた僧侶たちが、様々な寮舎に分かれて戒弟子に加行を行なって貰うことなどを説明いたしました。これまでの各種授戒会作法でも直壇寮に対する口宣が中心となっているものが多く、その進退などについては常に最重要の位置付けでしたので、そのことを説明しつつ、早速にでも配役を定め、各寮舎で協力しながら授戒会までの準備を進めるようお願いいたしました。

宗門授戒会は、近年でこそ国内での実施数も減っておりますが、江戸時代に大乘寺26世の月舟宗胡禪師(1618~1696)によって再興されて以来、明治・大正期くらいまでは宗門最大の教化行持として、各地の晋山結納に際して行われることが一般的でした。特に近代の宗門では制度面での整備が進み、両大本山の貫首猊下に戒師としてお越しいただくことが多くなりました。坐禅の宗旨とされる宗門ですが、両祖の時代から布教は授戒が中心でした。その最大の教化行持が、今回本格的に北米にも伝わる可能性があるということで、今後の展開に期待しております。

なお、今年も小生をお招きくださった秋葉玄吾総監老師を始めとする北アメリカ国際布教総監部、そして、曹洞宗国際センターの皆さんに、心から御礼申し上げます。

… 海外レポート⑥ …

海外特別寺院洞光山直証庵創立20周年記念行事について

おおやま けんじ
大山 健治 (SZI事務局・山形県清龍寺副住職)

令和元年5月10日から12日、曹洞宗宗務庁とオーストラリア連邦ビクトリア州仏教会協賛の下、オーストラリアでは初めての曹洞宗海外特別寺院に認定された洞光山直証庵の創立20周年記念慶讃諸法要、並びに晋山制式が執り行われました。曹洞宗宗務庁・曹洞宗国際センター、各総監部、地元ヴィクトリア州仏教会会長であるベトナム仏教光明寺住職ティック・ブオ・タン老師の全面的な協力があり、三日間の行事は大円成となりました。岡山県洞松寺住職鈴木聖道老師を西堂として拝請し、洞松寺の安居者や直証庵住職は松慧海老師の法縁や法類の諸老師方が日本や海外から約40名随喜され、鈴木包一老師が後堂、秋葉玄吾老師と峯岸正典老師が御先導師を、また喜美侯部謙史教化部長老師が慶讃法要導師をお勤めになりました。私は全国曹洞宗青年会からの参加でした。

今回は様々新鮮に心に響くものがありましたが、まずはこれまでの慧海老師のご苦労の話を聞いて感動いたしました。老師は20年前にオーストラリアに渡り、何もないところから奥様のデニースさんと二人三脚で自宅の車庫を坐禅堂として開放し、地道に布教活動を始められています。夫人は長男が生まれたばかりの頃にベビーカーを押しながら手作りのチラシを町のいろいろなところに貼って、そこから全てが始まったのだそうです。完全にゼロの状態からの布教活動には私には想像が出来ないご苦労と岩藤があったと思います。参禅者が増え別の場所を借りて坐禅会をするようになり、20年の間に沢山の縁が出来、いろいろな方々の支援を受けてやっとの思いで以前車庫があった場所に本堂兼坐禅堂を建て、毎日の暁天生禪、朝課や法要を本堂で行う事が出来るようになったのです。

また直証庵の参禅者の多くは在家度得や出家度得をし



是松慧海老師を囲んで。左隣は首座タイラー—心尼



嬉しそうな子どもたちと参列者が並んだ晋山行列

ていて、法衣を身に付けています。晋山式の行列で最初に目に入ったのは日本の稚児行列とは違う、ハロウィンの仮装行列みたいな子ども達でしたが、みんな嬉しそうに歩いていました。その後に慧海老師と五侍者、そしてズラッと法衣を着ている50人くらいの参禅者が歩いているのを見て、圧倒され感銘を受けました。

首座のタイラー一心和尚が78歳の日本人の女性だったという事にも驚きました。移住してから何十年にもなつていて法戦式も日本語と英語が混ざった禪問答を繰り広げ、杖を使っておられましたが、三拜は立派で、その尊い姿を見るだけで頭が熱くなりました。そして、晋山開堂や法戦式を多勢の参禅者さんが本堂を囲みながら一生懸命見ている様子に、緊張感と感動が伝わってきました。

慧海老師は「直証庵には何もないで、今回は全部おんぶに抱っこだった」と笑顔で話していました。日本から仏具など様々な支援はもちろんありましたが、光明寺さんからもかなり多くの仏具の貸し出しを受け、二日目の祝齋と三日目の記念昼食会に関わる食事、準備や片付けも全て供養という事でご寄付いただいたそうです。光明寺さんは「直証庵が発展していく事はオーストラリアの仏教会としては大変喜ばしい事なので、出来る限りの事をしたい」と言っておられました。

最後に慧海老師は、「大きな行事をする事になり大変になるとは思っていたが、最初にテーマは楽しむという事と、みんなが一人一人輝く事だった」と話し、「今回はみんなが楽しめるエンタテインメントという感覚と、規則を厳しくという感覚と、挑戦という感覚の三つを大事にする事を心掛けた」とおっしゃっていたのが印象的でした。

直証庵の今後の発展を心より願い、慧海老師を始め多勢の方々といろいろ貴重な話が出来、これから的人生の糧になる体験が出来た事に心から感謝しております。

… 海外レポート⑦ …

タイ上座部 スカトー寺滞在レポート

さとう えしん
佐藤 慧真 (SZI事務局・新潟県興源寺徒弟)

■ プラユキ・ナラテボー師との出会い

2019年3月15日より6日間ほど、タイ東北部チャイヤーム県にある上座部寺院、スカトー寺に滞在する機会がありましたので報告いたします。

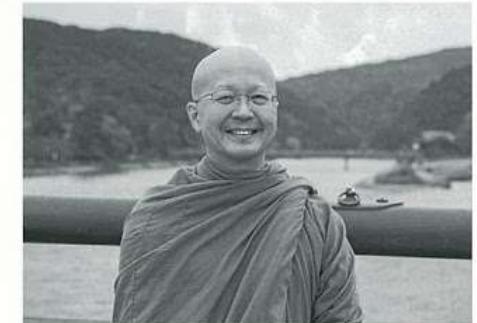
スカトー寺は上座部圏でもタイにおいて独特に発展した、社会的な問題を解決するために積極的な活動を行っている「開発僧(かいはつそう)」が農村開発をしている寺院として、これまでにも書籍等で紹介されています。私がご縁をいただいたのは、副住職のプラユキ・ナラテボー師が前国際センター所長の藤田一照師と度々対談をされたり、共著の上梓をなさった関係で知ったことから始まります(注1)。プラユキ師がNHKの「この時の時代」に出演されたのを拝見して、ぜひお話を伺いたいと師の帰国時に会いに行き、スカトー寺に行きたいため相談させていただきました。

プラユキ師は日本人で、上智大学卒業後タイの大学院に進み、現地でのボランティア活動の後、瞑想の指導者として有名なルアンポー・カムキアン師の下で上座部の僧侶として出家されています。現在はスカトー寺の副住職を務めながら、日本でのご講演や面談にも積極的に取り組んでおられます。私が注目したのは近年増加の一途をたどる、これらの病に苦しんでおられる沢山の人々が、プラユキ師の指導の下で変容を遂げ元気を取り戻しているという事実でした。番組ではこれまで二千人の日本人がスカトー寺を訪れたと紹介されていましたが、悩める人々の多くが元気を取り戻し、帰国後も良い状態を保っているということなのです。脳と心の科学を解説された御著書(注2)や瞑想に関する御著書(注3)なども拝読し、上座部の瞑想と禪宗の坐禪、また修行方法の違いなどを直接確かめたいと強く思った次第です。

■ 気づきの瞑想「チャルーン・サティ」

バンコクを早朝出発し、高速バスとサムロー(バイクタクシー)、ソンテオ(乗合トラック)を乗り継いで村に着いたのはもう夕刻でした。言葉が通じない中の長旅で緊張し、よろよろと山門をくぐった私でしたが、プラユキ師はちょうど藤田一照師との対談(ダーナネット「大乗と小乗を乗り越え結び合う道」www.danapnet.jp)の原稿を推敲されていたそうでした。私の他にすでに日本人の若者二人が滞在していましたが、私も小屋を一つお借りして過ごすことになりました。

タイでは女性の嗣法が途絶えているため正式な出家者はおらず、女性の修行者はメイチーさんと呼ばれていて、剃髪され皆さんは白い衣類を身に付けておられます。私は相変わらず黒い作務衣を着て、日本人の在の方々と一緒に過ごすつもりでおりました。



タイ・スカトー寺副住職のプラユキ・ナラテボー師

日本からの滞在者の一日のスケジュールはだいたい次のようになります。4時から5時過ぎまで朝の読経と法話。5時半より7時頃まで村内約5キロの道程の托鉢に同行。7時半朝食(上座部なので基本は一日一食。ただし午前中でいたぐことを約束として、私は各自朝食を少しキープしておくことが許されました)。この後夕方までは作務などもするが、基本は瞑想や勉強などを自由に過ごす。夕方の読経の後は外が真っ暗になるまでたっぷりプラユキ師とのグループミーティング。希望によりプラユキ師との個人面談も時間を見て行われる。

禪宗の晩天生禪のような朝の瞑想の時間は特に設けられていませんが、ここがスカトー寺の瞑想法「チャルーン・サティ」の独特なところで、法話を聞きながらでも瞑想が出来ることになっています。「チャルーン・サティ」はルアンポー・ティアン師(1988年没)が編み出した手動瞑想法で、タイ東北部を中心に多くの寺で行われているのですが、リズミカルに手を動かしその動作を一つひとつ確認しながら、今ここで気づきを培っていくというものです、じっと静止している我々の坐禪とは異なるユニークなものです。「絶対に考えをしてはいけない」とか「無心になれないからこの瞑想は失敗だ」と決めてつけることなく、常に「オープンハート」「オッケー、オッケー」という態度で自分のあるがままのこの状態を受け入れます。そしてまた手の動作への気づきに立ち返る、すなわち「今ここ」に戻って行くという手法です。ちなみに各種の瞑想法に失敗して悩む「瞑想難民」と呼ばれる人々にも、安心して取り組まれているようです。

実際、法話の最中にあちこちでバタンバタンと手が動いているのを目にしてしまったし、私も自然に目を開けたまま行っていました。スカトー寺ではこの他、伝統的なヴィバッサナー瞑想なども行なわれているようですが、途中開催されてい



スカトー寺の本堂。
壇上に男性僧侶、その下に女性修行者と信者が座る

た医療従事者等のリトリートでは、手動瞑想の他、十数歩を行ったり来たり往復する「チャルーン・サティ」の歩行瞑想バージョンをしている姿を多く目にしました。

日本人の滞在者にも入れ替わりがありましたが、確かに中には長年常用していた抗精神病薬をスカトー寺に来てからピタッと飲まなくとも良くなったというリビーターもいらっしゃいました。皆さんのお話を伺い自分も参加してみて思ったのは、「チャルーン・サティ」には優しさがあるということです。すなわち、目的を持って坐るのを非とする坐禅ではなくなかなかスタートが難しいのですが、「チャルーン・サティ」は理解と取り組みやすさにおいてEasyでありKindでもあるなと思ったのです。坐禅の「坐れば分かる」に、いきなり腰を据えて個人で取り組むのは難しいであろう(おそらくではあります)が、病で混迷している状態の人々の心にプラエキシ師は温かく寄り添い、「苦しまなくっていいんだよ」とブッダの教えを非常に分かりやすく、とことん解説されます。そして「手動瞑想などで気づきの繰り返しの作業を続けるうちに、「受容力」が培われてあるがままに現象を感知出来るようになり、その洞察によって智慧が育まれ、その智慧にこころが開放されればまた慈悲も育まれてくるんだよ。」と苦からの開放の道を力強く導かれるのです。

■充実したプラユキ師の公式Twitter

そんなブラユキ師の指導の下リラックスされた皆さんか
また揃って口にされたのは、上座部の僧侶の後ろに並んで



「仏教サイコロジー」 藤田一照、プラユキ・ナラテボー サンガ



毎朝5キロの道程を裸足で進む托鉢行。
途中で夜が明け朝焼けを見る

真っ暗なうちから村を回る托鉢への感動でした。野山のはるか遠くの空が朝焼けに次第に色付き、青い空に姿を現したヤシの高木が風に揺れる自然の美しさはまた格別でした。喜捨される村人が膝をつき合掌される敬虔なお姿を見、はにかんで挨拶される笑顔を見て、私も僧堂で行っていた托鉢の時の純粋な感動を思い出しました。

スカート寺での癒しの要素として考えられるのは、取り組みやすい「チャルーン・サティ」、プラユキ師の温かなお人柄、分かりやすくて的確な指導、グループ療法的な効果もありそうな夜のミーティング、森に囲まれたスカート寺の大 自然、ゆったりして見える上部の僧侶たち、敬虔な村の人々との交流、タイの山奥という非日常性などがあるかと思われます(個人的には、「こんな遠くまでたどりつけた」という自信も追加)。

問題はここで癒された後、心の状態を日常でも保つていいけるのかどうかというところですが、前述の通り、「チャーレン・サティ」には静寂等特別な環境でなくても出来る、取り組みやすさという利点があります(電車の中などで指だけで行う瞑想法もある)。一日10分から20分坐りましょうと緩やかに推奨されています。

また重要なのが、プラユキ・ナラテボー公式twitterでのフォローの影響が大きいのではないかということです。大変充実したtwitterで、仏教フリークや手動瞑想の実践者たちがファミリーのように盛んに交流をして、励まし合っているような側面も見られます(注3)。

以上、短い滞在でありますので雑感を述べるに留まつてしましましたが、個人的に大変学ぶところ多かったです。報告させていただきました。ブラユキ師には臨濟宗鎌倉円覚寺首長横田南嶺師との対談についてなども教えていただきました。最後になりましたが、篤く御礼申し上げたいと思います。

〔注1〕「仏教サイコロジー」藤田一郎・ブラユキ・ナラテボー サンガ)等
〔注2〕「脳と瞑想」最先端脳科学とタイの瞑想指導者が解明できかずしみをなくす脳と心の科学 ブラユキ・ナラテボー、鶴渕伸造 サンガ新書)
〔注3〕「彼らなきたって、いいじゃないか昔普ふる人のための仏教 瞑想入門」
ブラユキ・ナラテボー、魚川(北川) 光金舎)
〔注4〕 ブラユキ講師の講演会などの予定や著作物については、「よき様ネット」(blog.sanei.co.jp/volker/)をご覧ください。

SZI express

会費納入者・賛助金納入者名簿 2018年12月1日～2019年11月30日まで

ありがとうございます。
大切に使わせていただきます。
(敬称略・会費納入願に掲載)

■ 助成金

曹洞宗宗務序
大本山永平寺

■会費納入者二苦名

長野県長野市	天周院	東京都八王子市	大泉寺	山口県福山市	平成寺	東京都新宿区	龍光寺
静岡県静岡市	龍泉院	秋田県大仙市	満友寺	千葉県市川市	石井清純	埼玉県行田市	妙本寺
佐藤慧真		静岡県磐田市	新豊院	秋田県横手市	寿松木宏藏	長崎県諫早市	長楽寺
新潟県新潟市	隨流院	愛知県名古屋市	泰江院	静岡県富士宮市	萬松院	群馬県下仁田町	松源寺
神奈川県横浜市	吉祥院	神奈川県横浜市	普光寺	鳥取県米子市	御前御院センタ	宮城県仙台市	圓清寺
神奈川県湯河原町		静岡県高崎市	東善寺	京都府京都市	宗仙寺	東京都中野区	東大寺
神奈川県横浜市	栄林寺	群馬県高崎市	高岩寺	群馬県安中市	宗泉寺	東京都八王子市	大泉寺
京都府宇治市	興聖寺	東京都八王子市	龍見寺	静岡県焼津市	林叟院	愛知県名古屋市	泰江院
元長寺		東京都豊島区	高岩寺	神奈川県横浜市	正昌院	東京都八王子市	龍見寺
岡山県矢掛町	洞松寺	東京都葛飾区	万福寺	石川県金沢市	三香美成子	東京都豊島区	高岩寺
三重県紀宝町	東正寺	長野県伊那市	常圓寺	長崎県佐世保市	洞禪寺	東京都葛飾区	万福寺
岐阜県飛騨市	福島県猪苗代町	天慈寺		静岡県清水町	坂鳥誠之	福島県猪苗代町	天德寺
別府良孝	秋田県秋田市	天龍寺		東京都世田谷区	照源寺	秋田県秋田市	天龍寺
埼玉県羽生市	建福寺	愛知県豊田市	水澤寺	京都府亀岡市	苗秀寺	愛知県豊田市	永澤寺
茨城県笠間市	龍泉院	東京都八王子市	信松院	神奈川県横浜市	貞昌院	東京都八王子市	信松院
山形県酒田市	持地院	埼玉県上尾市	東榮寺	神奈川県鎌倉市	龍寶寺	宮城県仙台市	秀林寺
千葉県我孫子市	觀音寺	福島県いわき市	匡王寺	群馬県桐生市	祥雲寺	東京都杉並区	觀泉寺
千葉県安来市		新潟県上越市	曹洞宗第三宗務所	神奈川県秦野市	泉秋寺	新潟県南魚沼市	雲洞庵
愛知県瀬戸市	寶泉寺	宮城県仙台市	秀林寺	静岡県沼津市	大泉寺	福島県郡山市	乾德寺
山形県鶴岡市	龍藏寺	東京都豊島区	祥雲寺	静岡県牧之原市	大興寺	神奈川県横浜市	永明寺
愛知県豊橋市	西光寺	秋田県秋田市	福種寺	新潟県阿賀野市	慶康寺	静岡県静岡市	瑞光寺
群馬県高崎市	仁叟寺	東京都杉並区	觀泉寺	埼玉県熊谷市	集福寺	東京都台東区	玉宗寺
東京都杉並区	西照寺	千葉県成田市	永興寺	神奈川県横浜市	偷勝寺	長崎県佐世保市	青眼院
神奈川県横浜市	大藏寺	新潟県魚沼市	霧洞庵	静岡県牧之原市	孤雲寺	大阪府堺市	吉祥院
静岡県藤枝市	洞雲寺	静岡県焼津市	信香院	山形県庄内町	見龍寺	長野県松本市	廣澤寺
新潟県新潟市	大乘寺	広島県福山市	聖光寺	埼玉県川口市	円通寺	福島県本宮市	石雲寺
千葉県千葉市	宗嚴寺	秋田県能代市	長慶寺	神奈川県横浜市	成願寺	千葉県袖ヶ浦市	真光寺
福島県郡山市	長泉寺	枥木県那珂川町	乾德寺	愛知県大府市	地藏寺	秋田県横手市	滿福寺
秋田県秋田市	輔陀院	愛知県豊盛市	松月寺	福井県大野市	洞雲寺	長野県佐久市	山本健善
群馬県太田市	曹洞宗第三宗務所	東京都文京区	江岸寺	愛知県名古屋市	大光院	福島県郡山市	財福ビース社
栃木県モロ	御才モロ	柳本県大田原市	黒田泰弘	宮城县仙台市	龍雲寺	千葉県市川市	石井清美
群馬県伊豆市	大乗寺	宮城县名取市	円滿寺	山形県尸沢村	清林寺	鳥取県米子市	體證懶僧センタ
兵庫県神戸市	東福寺	静岡県静岡市	法幢寺	岩手県奥州市	正法寺	京都府京都市	宗仙寺
京都府京都市	宗徳院	神奈川県横浜市	永明寺	長野県塩尻市	興龍寺	群馬県安中市	宗泉寺
東京都新宿区	大龍寺	宮城県仙台市	洞林寺	岩手県盛岡市	紙陀寺	東京都世田谷区	照源寺
埼玉県熊谷市	東竹林院	宮城県仙台市	啓東北韻長大学	埼玉県鴻巣市	宝持寺	群馬県桐生市	祥雲寺
埼玉県川行田市	長光寺	群馬県安中市	雲門寺			神奈川県秦野市	秋葵寺
神奈川県横浜市	天慈院	静岡県静岡市	瑞光寺			新潟県阿賀野市	養菴寺
愛知県名古屋市	神藏寺	静岡県浜松市	高林寺			神奈川県横浜市	大本山總持寺
静岡県伊豆の国市	成願寺	東京都台東区	玉宗寺			神奈川県横浜市	成願寺
石川県金沢市	大乗寺	愛知県名古屋市	御安江			愛知県大府市	地藏寺
神奈川県横浜市	西有寺	長崎県佐世保市	青眼寺			長野県塩尻市	興龍寺
大分県由布市	佛光寺	大阪府堺市	吉祥院			岩手県盛岡市	紙陀寺
山形県庄内町	宝泉寺	富山県高岡市	明照寺			埼玉県鴻巣市	宝持寺
長崎県諫早市	妙本寺	長野県松本市	廣澤寺				
埼玉県玉川市	留雲寺	山形県河北町	清龍寺				

■ 資助金納入者(二)若